れた女子立派な親分の御對手には取るに足らぬ者かと存じます、主人の心配を見るに忍びずお詫びに出ましてございます、どうぞお仙をお渡し下さいますやうにお願ひ申します』荒『これお仙を此方へ引上げたのは、荒五郎に些と考へがあつての事だ、巻屋五郎左衛門とも云はれる者が、其位な事ア分りさうなもんだ、對手は此荒五郎だ貴様達の若年者が掛合に來たとてオ、爾うかと云つて渡せねえ、口火と云ふものが無きやア花火は出ねえもんだ、歸つて爾う云へ巻屋の主人に出て來い、瀧川の荒五郎が些と言分がある、手前達が頭を並べて來たつてオ、爾うかと渡せねえ』所へ背後の方から子『親分……』荒『何だ』子『今歸つて來ました』

荒『諾どうした』子『駕籠に乘せて邸に連れて來て呉れ、此方で意趣返しをして恨を霽すから縛り縄の儘で急いで連れて來て呉れと云ふことで……』荒『爾うかそれぢやア早く駕籠を云ひ付けて庭口から誰か二人ばかりで連れて往きな、ア、長居をしたつて是つ切りのもんだ、早く歸つて五郎左衛門自身に出て來いと爾う云へ』平賀佐平治が主水に眼配せをして　佐『御聽入がないと云ふ上からは據ろないが、困つたもんだな作兵衛さん』主水さん佐平治さんとは云はれない、作兵衛さん清兵衛さんと云つて變名を用ゐた　主『けれども清兵衛さんお前も私も男だ、主人の心配を見るに忍びないで扱ひに來て、親分の御聞入がなかつたと云つて、此儘ノッ〳〵とは歸られない、花火も口火なきやア出ないと云はれたは、是は遺恨はお仙殿

ぢやアない、五郎左衛門にあるんだ、此方から事を好むぢやないが、先方でア、出なさりや己むを得ない話、主人が恥を掻けば家來は死ぬのが武士の法だ、俺達は武士ぢやアないが、兩人連れ立つて來て此方もオ、さうかと云つて、後へ引けねエぢやごわせんか、お前も私も大阪の俠客はどの位腕節があるか、一つ腕づくでお仙を戴いて往かうぢやないか』佐『そいつは作兵衛さん面白からう、やッつけませう……、オイ荒五郎さんお仙を渡されねエと言ひなさるが、腕づくで持つて往くがどうだ』荒『何だ腕づくで持つて往くと、生意氣な事を言ひなさるな、瀧川の荒五郎とも云はれる者が、手前達のやうな青二才に腕づくで持つて往かれるやうな毫祿はしねエぞ、サア持つて往かれるものなら持つて行つて見ろ』○『親分此奴等を擲んじまはう、ソレやッつけろ』と云ふと忽ち七八人疊を蹴立てゝ摑み蒐つて來る、主水佐平治の兩人　○『這は面白し』と突立ち上り打つて來る奴を、投る蹴飛ばす撲り倒すイヤ大變な騒ぎ、佐平治もモウ必死に成つて、及ぶだけの手術を現して働くと　△『イヤ此奴等ナカ〳〵の奴だ』と云ふより居合した者が總立ちになつて打つて蒐る、佐平治一人に任しては置かれぬから、主人も共に躍出し兩人にて打つて蒐り、子分の奴等を手玉に取つて投る、其間に庭口から駕籠が一挺子分が兩人附いて　子『ソレ急げ〳〵』主水が見ると　主『佐平治ソレ駕籠をやつてはならぬ』と云ふと、佐平治がバタ〳〵つと駈出し、雨戸を蹴飛ばして戸外に出て、

駕籠の棒先をウムと押返した、術で押されたから駕籠舁は腰が碎けてペチャンと坐ると、駕籠がドーンと土に着いた、駕籠脇に附いて居た子分が兩人　子『己れ邪魔するか』と打つて來る奴を、佐平治が足で蹴上げると脇腹に當つて一人はウーンと氣絶、又一人が打つて蒐る其の利腕を取つて肩に擔ぎ、エイと腰を捻ねくると、見る間に彼方へ二間も先へ投付けられた、佐平治急いで駕籠の垂簾を上げると、お千が猿轡に縛り繩　佐『サアお仙さん』子『ソレ其奴をやつてはならぬ』と云ふ間に佐平治はお仙の體を小脇に抱へ込んでバラ〳〵駈けて逃る、主水も圭『モウ宜い』と思ふから此處を逃出す算段、

子『お仙をやつちやアならぬと』追て出る奴を、主水が二三人其處に投り付けて尻引ばしよつた儘、バラ〳〵逃げて行く、瀧川の荒五

郎は呆氣に取られて手も出せないで見て居る、力量はあるだらうが術のある氣遣ひはないと侮つた爲に、散々の失敗すると轡屋から米搗が　○『奥のお客が兩人で行つたそうだが、どんな事になるかも知れないから往つて見やう』と云ふので五人で出て來ると、先方から佐平治が、ドン〳〵駈けて來て佐『男衆か、サアお仙さんを連れて行つて呉れ』男『エ宜しうがす』とお仙を擔いで、佐平治諸共轡屋指して歸つて來る、箕時すると主水も逃歸つて來て　圭『さて轡屋さん、荒五郎と云ふ奴は大きに分らない奴だ、仕方がないから腕づくでお仙さんを連れて來たが、口火が無きやア花火も出ないとか言つたが、どうも遺恨はお前にあるやうだ、口火のお仙さんが家に居ると又

面倒だ、お前に向ふから蒐つて來るのは遠いが、お仙さんの仕返しは近いから、是はお仙さんを當分家に置かない方が宜いかと思ふ』五『宜しうございます、夫ぢやア一つお仙を家内の實家の方へ預けませう』泉州境の種田屋仙吉と云ふ材木商人が轡屋の女房の實家であるから此處に手紙を附けて直ぐとお仙を駕籠に乗せてやつて了ふ、此方は荒五郎の子分が大勢集つて中には負傷をした者もある　子『何しろ米屋の手代に荒五郎の子分が大勢投られたと云はれちやア、仲間に顔向が出來ないから復讐に行かう』と云ふのを荒五郎が　荒『待てよ、どうも今の手代兩人が唯の米屋の奉公人ぢやア無いやうだ、又彼の轡屋と云ふものが米問屋なら手代も要るが彼の位な米屋に手代が兩人も居る氣遣ひがない、是には必定何か仔細がある、又再び敗を取つちやア此方の耻辱だ、マア〳〵能く考へて復讐をするが宜い、何か良い手段があらう、滅多な事をするより・・・』子『だつて親分殘念ぢやアごわせぬか』荒『殘念だつて再び耻辱を取つたら尙ほ殘念だらう』此復讐を荒五郎が止めた、スルと段々其評判が立つて　甲『モウ瀧川の親分も可けねえや、醜態が無えぢやねえか、米屋の奉公人兩人に子分を滅茶々々にやられても、荒五郎は手出しをしねえと云ふぢやないか』乙『何だかそんな話だが、米屋の手代と云ふのに當身を當てられて氣を失つたさうぢやねえか、昔は瀧川の親分と云つちやア泣く兒も默つたが、年齢は老りたくねえな』甲『何だか知らねえが南部の家來に金で賴まれて轡

屋のお轉婆娘に復讐をして呉れと云はれたからとて、明日にも役替がありやア奥州へ行つて了ふ人間ぢやアないか、夫れをお前僅かの金で賴まれて引受けるなんて、意氣地がねえぢやアないか而も對手は娘の子だ、荒五郎だつて大阪に生育つて轡屋の親分と、其以前若い時分には隨分交際もした人だらう、其大阪者を僅かの金で鼻を碎かうと云ふのは、俠客ぢやアねえや』乙『爾うよ、荒五郎は怖かなくねえ、瀧川の半纏を着て居る奴が差賣りに來たつて買ふな、まう腕前の知れた老込だ』と云ふので、サア荒五郎の重石は全然利かなくなつた、瀧川の半纏を着て往來を行くと後指を指されて馬鹿にされる、賣出しの俠客の子分ぢやアないと云はれて其肩身の狹いこと夥しい、其評判が立つて何となく荒五郎も面白くない、乃で身體が惡いから湯治に行くと云つて、プーッと荒五郎が身を隱して了つた、此方は主水が神兎重助に對面して　主『偖て先生、私は久しく母に對面せんで何となく案じられるから、一度江戸表に行かうと存じます』重『何しろ轡屋の一件は鈴木お前も些と不出來だつた、遺恨にならなきやア宜いが荒五郎は身體が惡くつて湯治に行つたと云ふ、荒五郎の部屋は寂として了つたが、諸方の御屋敷は意氣地無しの荒五郎の子分を入れるなと云つて居るから、彼等は飯の食上げだ、是から自暴と云ふものが怖い、何しろ荒五郎は今は身持が惡くつて居らないが、此後は俺が師弟の緣のある者だから、轡屋の身體は蔭になつて俺が防ぐことにしやう、夫ぢや

アお前は江戸に行くが宜い』圭『有難うございます』重『ソコでお前の私邸は以前の處だらう、けれども江戸に着いたら一つ、此方に飛脚を遣して呉れろ、長尾治太夫の供をして筑波三平が、大阪の藏屋敷の勤番を云付かつて出て來るやうなら、早速知らせを出すから、今度はお前の親父さんの取立てた門弟で、腕前の出來る者を五名程伴れて來さつしやい、お前は助太刀を頼む了簡はあるまいが、殊によると此處の藏屋敷で仇讐を討つやうになるかも知れぬ、無益の人の生命を取つても詰らぬから、其時は此重助も助勢をしてやらう、又此の森の藏屋敷の留守居に森庄右衛門と云ふ者がある、此人は私が年來懇意だから、此人に腹を合して讐討の折には、筑波三平の加勢をしやうと云ふ、長尾治太夫の家來を働かせないやうにしなければならぬから、少し人數を連れて來い』圭『有難うございます』重『夫れから五郎左衛門は當分夜歩行はしないやう、荒五郎は大阪に居なくも荒五郎の子分が大勢居るから輕舉をしないやうに爾う言つて呉れ、お前は大小を取り上げられて了つたらう、是は私が若い時分帶した刀だ、之をお前に讓らう』圭『有難うございます』ソコで路銀の手當まで神免老人がして呉れたから、大きに喜んで轡屋へ歸り、五郎左衛門に向つて 圭『さて轡屋さん長々御厄介になつたが、私は一度江戸へ還つて、久々で母の機嫌も聞きたいと思ふ』五『左樣でございますか此度は又娘お仙の大事をお助け下さいまして・・・』圭『イヤ私こそお前のお蔭で津山で命拾ひを

したんだ、何れ私の心願は御當地か江戸だ、又再會する時もあらう、當分お前は荒五郎が居なくても輕舉の夜歩行なんぞをしないやうに、堂島の神免先生も左樣言つたから・・・』五『有難うございます』乃で旅仕度をして是から別袖の酒宴、其晩は快く飲んで寅刻起をして主水佐平治は茲で大阪を出立して了ふ、話頭一轉荒五郎は有馬の湯治場に來て二三日居て見たが、湯治場は同伴がなければ寔に面白くない、夫も身體が惡ければ癒さうと云ふ慾もあるが、身體は元々惡くないから湯治場の會計をして、播州明石に日頃交際をして居る俠客の親分がある、此處へやつて來て遊んで居ると、どうも以前のやうに欵待して呉れないと云ふのは此明石と大阪とは十五里しか離れて居ないから、モウ大阪の惡評は播州へも聞えて 甲『荒五郎の奴は大阪で、南部の家來から僅かの金で復讐を頼まれ、對手は米屋とか材木屋とかの娘つ兒ださうだ、下らない男ぢやアねえか、加之に其處の手代とかに子分を大勢暴されながら、手出しもしねえで指を咬へて見て居たつてエのは、三郷一の俠客と云はれる奴のする事ぢやアねえ、トウ〳〵大阪に居られねえで、此方へ逃げて來やがつた意氣地なしめ、交際ふ奴ぢやねえ』と平素玉造りの親分と、下へも置かぬやうに取扱つて呉れた者が、鼻汁も引掛けない有樣、サア斯うなると尚々殘念が加はつて腹が立つて堪らない 荒『大阪に立歸つて此復讐をしなければ顔に障る、兩人の手代を只は置かない』乃で荒五郎は再び大阪に歸つて來

る、荒五郎の娘にお玉と云ふ美人がある、斯う云ふ仲間は始終好い事ばかりはない、或時に荒五郎が甚く敗が續いて道樂が附かなくなつた、北新地へ藝妓に出した所がドン〳〵賣れる此爲に荒五郎も息を吐いた。スルと吟味方の町與力で天滿南町に私邸のある、岡田與四郎と云ふ者が此お玉を甚く寵愛して、遂々大金を出して身受をして圍つて置いた、其内に此岡田與四郎の本妻が病死したので、乃でお玉を本妻に直して私邸に入れた、夫が荒五郎の賴み處だから、錢がなきやア往つて無心もし融通が利いて居つたけれども、今度の一件はナカ〳〵金で耻辱を買戻すと云ふ譯には往かないから、娘にも話をしないで湯治に出掛けて、夫つ切り何うしたのか手紙も寄越さない、其處は親子の人情だからお玉は甚く親父はどうしたかと案じて居ると、與四郎が與『お玉何そんなにを心配して居るんだ亦親父の事だらう、どうも今度の始末は親父が惡いよ、同じ大阪者の娘を、今日居て明日居なくなるかも分らない南部の家來に僅かの金で賴まれて、引擔ぐなどと云ふのは下らない事だ、而も對手は未だ十九歲の娘ッ子だと云ふぢやないか、親父に會つたら俺が意見をしやうと思つて居るんだ、謂はゞ自分で金箔を落した譯、其内には便りがあるだらうからそんなに心配をしないでも宜い』と宥めて居る、或日荒五郎は大阪へ歸つて來たが、外に賴つて往く所がないから、岡田の私邸へ忍んで勝手口へ來て　荒『御免下さい』下女が戸を開けて見て　女『オヤ〳〵荒五郎さんでございますか、モウ御新造さんが大層な御心配、能くマアお入來になりました……御新造さん玉造りの親分御尊父さんが……』玉『オ、爾うかい』とお玉が飛んで來て　玉『マア親父さん能く歸つて來て下すつた、昨夕もお前の噂をして居た所、マア何しろ座敷へお通り下さい』荒『旦那は……』玉『今日は御役所に何か難かしい調物があるとか云ふので、未だお歸りになりませぬ』荒『俺ア旦那にお目に懸るも耻かしい』玉『そんなに氣をお落しでない、又何とか旦那が相談對手になつて下さるだらうから、お鬱ぎでない、私も旦那に賴んで上げやうから氣を大きく持つておいでなさい、酒は憂の玉箒と云ふからマア一杯お飲なさい』乃で酒が出る、久し振りで娘の酌で一杯飲むと、大きに氣が强くなつた　荒『ア、持つべきものは娘だ、成程俺が僅かの金に眼が眩れて、巷屋の娘を引擔いだ時五郎左衞門が大層心配をしたと云ふことであつた、能く人情は考へて掛らなければならない』と考へると、サア酒が苦くなつて甘くない其内に玄關の方で　○『お歸り』玉『ソレ旦那がお歸り』と云ふので、一同出迎ひに出る、岡田與四郎立歸つて來て荒五郎に面會、一伍一什を聞いて傍ら氣に入りの女房の取做しに、一寸魔が差して岡田與四郎、德川家の耻辱になるも顧みず横道を働くの御話と相成ります、偖て立ち歸りました岡田與四郎　與『イヤ荒五郎如何致した』荒『旦那貴所へ向ける顏がございませぬ』與『イヤお玉が甚く心配して居るので俺も案じて居た、マア併し能く立戻つて來て呉れた』こ

れから酒が出て荒五郎が斯々爾々であつたと話をすると　與『荒五郎貴様年齢が若けりやア、是から又恢復すと云ふこともあるが、お前の年齢ぢやア、一旦臭味が付いたと云はれちやア挽回すのには骨が折れる、何處ぞ他國でお前の氣性なら何うか旗上げが出來さうなものだが行先の目的は無いものか』荒『へエマア往けば江戸でございます、以前世話をして置いた若い者が江戸で二三人、好い顔になつて居りますから』與『夫ぢやマア江戸へ出るが宜い、就ては何か心に懸る事があるなら言へ、お玉と斯う縁を結んで見れば、お前は俺の長上だ何處までも肩を入れてやらう』荒『へエ有難うございます殘念なのは轡屋と云ふ奴です手代が兩人、どうも彼奴が何だか曲者だらうと思ひます、豪い者を轡屋が飼つて置くのは、彼奴も何か希望でもあるのでございませう』與『イヤ今晩アゝして斯うしてと云ふ譯にも往かない、何しろ俺は些と今日は疲れて居る、夫にグイ飲で醉つて居る、貴様はマア酒が強いしお玉を對手に久しく會はないから積る話もあるだらう、緩くり飲むが宜い俺は寢る』是から與四郎は晩飯を喰つてお玉に寢床を敷せて、次の寢間に這入つて寢て了ふ　玉『親父さん旦那も有難い事にはあの位仰しやるから、夫れぢやア江戸においでなら、何かい賴る處はあるのかい』荒『それはマア江戸に往きやア何うかならうと思ふ、夫に付けてもお玉、轡屋が己ア癪に障つて堪らない』　玉『それは私が今夜の寢物語に旦那にお賴みして上げやう』荒五郎も好い工合に酩酊をして

寢て了ふ、與四郎は勤めの疲れで高鼾、其晩はお玉も話をしませぬが、翌日になると與四郎は例の通り役所に出勤をして夕刻役所から歸つて來て　與『親父は何うした』玉『何だか落膽疲れて居ると見えて、一遍起きましたが御酒を戴いて又眠りました』與『諾々……是れは娘の居る所へ來て安心をしたので、今までの疲れが一緒に出たのだらう、私も一杯飲んで見やう何か荒五郎が話をしたか』玉『ハイ良人の仰せもあるから、江戸に往つて身を立てやうと云ふ親父の話でございますが、大阪に居れば老込んでも何事もないが、死ぬまで玉造りの親分瀧川の親分と云はれて、葬式も立派に出せるのが、轡屋のお蔭で知らぬ土地に往つて、一苦しみしなければならない、夫が眞に殘念だと申して居りました、何うか良人の御威光で親父の意趣返しをして、戴けば私まで嬉しうございます』

（第二十六席）　五郎左衞門牢死の事、並にお仙與四郎を討つて父の仇を報ゆる事

皆左樣でも御座いませぬが大阪詰の與力には、隨分横道な事をしたが者あると思ふ、と云ふのは與力と同心と大阪に居付の役人だが、町奉行は江戸から大阪へ御役替になつて來て居るのですから、何うか大阪在役中は役向は失策たくない、無事に勤めて又江戸に召戻されて、御勘

定奉行か江戸の町奉行か、御目付あたりにならうと云ふ希望がある、謂はゞ大阪へ腰掛勤務出世處だから唯モウ大事に勤めて、失策さへしなければ宜いとしてある、永く居て十年勤めて居る人はない、大抵五年か六年、短かければ三年腰掛の出世、處で與力に憎まれると役が勤まらないから、古い與力の言語次第になつて居る、與力が御膳を据ゑて町奉行が箸を取るやうなもの、乃で岡田與四郎が　與『諾し夫れぢやア親父の殘念を晴してやらう、今度の御奉行は小田切土佐守、まだ此間大阪町奉行になつて、此方に乘込んで來たばかり、まだ大阪の勝手も本統に分らないから、乃公の云ひなり次第に此大阪の政治はなつて居る、必ず無念を霽してやらうから、親父が江戸に往くのを姑く見合させろ、俺の所に斯うやつて居れば手の付人はない、親父に此方に居て俺の配劑を見て、さうして江戸に往くが宜いと能く親父に左樣云へ』玉『有難う存じます』乃で兩三日經つと岡田與四郎が使つて居る手先きに　與『長堀南詰穀物渡世轡屋に手代が兩人居るさうだが、彼處ぢやア米問屋と云ふぢやアなし、手代が兩人なんて居る譯がない、何う云ふ身分の者か一つ取調べて見ろ』是から探偵をして、四五日經つと手先きが　手『段々探つて見ましたが、手代なんと云ふ者は居りませぬ、内々聽いて見まするとと以前は兩人轡屋の奥座敷に居たさうで、どうも轡屋の奉公人ぢやアない客らしい近所の者の話しでは何處かの身分の判然言へない、浪人だらうと云ふことですが、夫はモウ

立つて了つて居りませぬ、夫れで先頃荒五郎の部屋に入つて腕前を現はしたのは、その浪人だと云ふ事でございます』與『ぢやアその浪人を隱まつたと云ふ廉で轡屋を上げても上げられるだらう』手『其浪人の身分さへ不確かであれば隨分物になります、無理に拵へれば上げられます』與『諾……』乃で轡屋に呼出狀が付いて、差添人同道で罷り出でろと云ふ、何だか分らないが町役人が差添へで奉行所に出ると、白洲に呼込れて係りが岡田與四郎　與『轡屋五郎左衛門』五『へエ……』與『其方宅に先頃兩人の浪人が止宿して居つた筈ぢやが、彼は何う云ふ者で何方の浪人で御主人は何の守だ、何う云ふ緣故で其の方が隱まひを致したか、當今は居らぬと云ふ穿鑿が屆いて居る、其者の身分を判然申上げろ』五郎左衛門は吃驚した、是は明かに言へぬ、大阪へ長尾治太夫の供をして、筑波三平が來るだらうと云ふ見込のある矢先だから鈴木の讐仇の妨げになる　五『ハ、ア是は津山の御家來から大阪の藏屋敷に打合して森公から町奉行に依賴になつたんだらう、何しろ彼は鈴木主水、一人は平賀佐平治と云ふ家來、夫は是々の希望ある人でと此處で言つちやア、鈴木さんの心願が成就しない』と考へたが咄嗟の間だから旨い考へも浮ばないが、取敢へず五郎左衛門が面を上げて　五『申上ます、成る程私共に兩人泊り客がございましたが、決して怪しい者ではございませぬ、是はさる御大名の藏屋敷の藏方の御役人樣で、少々の間違ひから御暇になりましたもので、以前私がお米の御拂

下げで御出入りをして居ります時分、御拂米扱ひの御世話になつたお方で、當分誠に困ると云ふ御話もありましたものですから、其御緣で先頃御世話を致しましたが、當今は御歸參も叶ひましておいではございませぬ、歸參の叶ふ程の御人でございますから、決して身分上にサラ〳〵怪しい事のないお人でございます……』奥『大阪の藏屋敷と云ふても數軒ある、身分に差支へのない浪人なら、何の守の藏方で何の某と云ふ者で、今再勤して何役をして居ると云ふことが、此處で言へるだらう決して不都合はならう、申立てろ』五『其儀に就きましては御身分のある御方でございまして、其の御方へ甚だお氣の毒になりますから、恁うか詳しく取調べなしに願ひたうございます』奥『上の政治に詳しく調べるなと云ふ左樣な御政治はない、コレ其方の申立ての言葉の中に何分合點の往かぬ所がある、隱まひし浪人の身分を判然申上げられぬのは、必ず何か胡亂のある者だらう、氣が散つて考がへが着かぬから入牢を申付ける、能く牢の中で考へて浪人の身分を申立てろ』五『それは何うも情けないお言葉で、必ず上のお係合になりませぬ者でございまして、申上げぬでも決して御政法の妨げにはなりませぬ者でございます』奥『默れ其言葉が合點が往かぬのぢやア剛情な奴だ、云へなければ云へるやうにして云はする、入牢を申付ける』縄打てつ、町役人左樣心得ろ』町『へーエ』遂に五郎左衛門は入牢申付けられました、家内の者一同は何うしたら宜からうと心配致しますと藤五

郎が藤『浪人を隱匿つた科で親父さまが入牢、浪人と云ふのは鈴木さんと佐平治さんだらう奥座敷に居て姉さんが玉造に擔がれて往つた時、取戻しに行つて呉れた、成程腕は能く出來る、親父はアレは鈴木主水さんと平賀佐平治さんだと云へさうなもんだな』○『けれども彼の方は堂島の先生の所から賴まれて預かつてお在になつたのですから、名は知つて居ますが何處の人か分りますまい』藤『ぢやア神免先生の處へ往つて伺つたら分るだらう』と藤五郎が神免重助老人の所へ出て來ますると、秋月右衛門が土佐の高知の殿樣へ召出された時、手前には二刀流の名人の伯父がありまして、當時大阪の堂島に居る重助先生と申す者でございますと申上げますると殿樣が『どうか其名人を呼んで、腕前を見たいと云ふお賴み、迎ひが來て神免重助は高知に立つて往つて今居ないと云ふ、代稽古をして居る者には、何も分りませぬ又滅多な事も云はれないから、何れも門弟達は分らぬ〳〵と云ふ、藤五郎は落膽して歸り鬱いで居りますと、入牢になつて三日目に轡屋五郎左衛門が牢死したに依つて、死骸を引取れと云ふ御沙汰、サア一大事、泉州堺の竹田屋へ知らせてやりますと、お仙は膽を潰して歸つて參りまして死骸は引き取りましたが、さう云ふ譯ですから立派に葬式を出すことは出來ませぬ、後で本葬を出すと云ふことにして取敢へず假埋葬に致しました所が、初七日が經つと岡田與四郎が下役手先を伴れて轡屋に出張つて、不審の浪人を隱匿つたと云ふ廉で家は缺所

の上、家内一同大阪三郷お構ひと云ふことになりました、ソコで堺の竹田屋仙吉と云ふが、轡屋の舍弟でありますから、此處に一同引取られることになりましたが、左しも大家の轡屋も瞬く間に潰れて仕舞ひました、町内の人達は驚いて何うしたんだらう、バッたり轡屋が缺所になつて仕舞つた、人と云ふものは判らないもんだと云ふ評判、お仙は竹田屋に引取られて居りますが、利かぬ氣性の女でございますから朝夕口惜涙に暮れ齒噛をして居ります、茲に以前長らく轡屋に奉公をして居つた者で、當時安土町へ米屋を開店して、丹波屋直次郎と云ふダイガラドリをして居る者があります、大阪でダイガラドリと云ふのは東京の米搗の事で、今ではそんな者は東京にはございませんが、其の昔は玄米を俵で買ふ家か或は御扶持を戴いて居る御家人が、搗屋を賴みますと、先方から大道搗の臼をゴロ〳〵轉がして來て、搗いて呉れたものです、夫れを大阪ではダイガラドリと云ふ、直次郎は其商賣をして居るので丹波國の生れですから家名を丹波屋と命け、律義に商賣をして居りますと、段々仕合せが續いて近頃では大分工面も宜くなりました、久々で故郷の丹波國に往つて、先祖代々の墓詣りをして驛て大阪へ歸つて參りました所が、丹波屋の不在中に轡屋五郎左衛門は、浪人を隱匿つた廉で召捕られて牢死致し、家は缺所になつて家内は一同大阪三郷村構ひとなつて、内儀さんの實家の竹田屋へ引取つたと云ふ話を聞いて吃驚贍を潰し、自體直次郎と云ふ人は實體

な人でございますから　亀『ア、氣の毒な事をした、今自分が斯うして安樂に暮して居ると云ふのも、轡屋の主人のお蔭、是は堺へ見舞に往つて來なければならぬ』と早速土産を調へて堺へやつて參りまして一同に遇ひ　亀『偖何うも若旦那とんだ事に成りましたナ、私が佛參りの爲め故郷に往つて居る間に、斯う云ふことに成らうとは夢にも思ひません、お氣の毒樣で何とも申しやうもございません』と云はれて、先立つものは涙のみ、鼻詰らして　藤『直次郎や實に夢のやうで斯うして居ても、今に親父さんが酒にでも醉つて、歸つてお出なさるかと今だに思ふ、夫れに就けても隱匿つた御浪人と云ふのは堂島の先生から賴まれたで、成る程世間を憚かるやうな所はあつたが、誠に柔和なお人で惡人とは思はれない』直『岡田與四郎さんがお係りだと聞きましたが、何ぞ旦那樣が岡田さんに恨まれるやうな事でもあつて、意趣返しにでもお逢ひなすつたと云ふ御見込がありませんか』藤『どうも私には心當りがない、親父さんは彼の通り人の世話好きで、賴まれては厭と云へぬ性分、祖父さんから讓られた身上を滅した位、隨分情けは施してあるが、何う考へても人に恨まれるやうな事はないと思ふ』亀『お嬢さん貴女は何うでこざいます』仙『外に何も斯うと思ふ事もないが、藤次郎と私が芝居を見に往つた時南部樣の御家來と斯う〳〵云ふ喧嘩をした其の復讐でせう、出し拔けに私を擔いで玉造の荒五郎の部屋へ連込んで、淺ましい縛り繩に猿轡、其の時家に泊つてお出な

すつた、主水さんと云ふ方と佐平治さんと云ふ方が、家の手代になつて來てお掛合なすつたんだよ、所が荒五郎が餘り無法な事を云ふので、腕づくになつてね、マア其お方々は大層な腕前私は駕籠の中で縛られた儘見て居たが、大勢の子分を投付けて私を取戻して下すつたんだよ、其の時には流石の荒五郎も手を出し兼てボンヤリ見て居たが、夫から彼の荒五郎の評判が惡くなつてね、大阪に居られぬやうになつたと見えて、湯治に行くと云つて出た切り今だに歸つて來ないよ』直『ア、夫だお孃さん』仙『何だい直次郎ソレだつて……』直『荒五郎なれば當時大阪へ歸つて居ます』仙『何處に』直『ヘエ私が丹波から歸つて來ますと、日頃出入りの岡田與四郎さんから食料がなくなつて、困るから早く來て搗て呉れろと云ふ、大切なお得意ですから私アすぐと往つて米を搗きました、其の時に私は餘り咽喉が乾いたので、臺所へ往つて水を飲みながら見るともなしに座敷を見ると、瀧川の荒五郎が旦那樣はお勤めに出て居て御留守なのに、御新造に酌をさせて酒を飲んで居りますから、ハテ不思議と思ひまして、彼處に居るのは玉造の親分だらうと下女に聞きましたら、ハイ荒五郎親分ですと云ふ、何うして此方にと聞くと今の御新造さんは、そんな事を云つちやア濟まないが、素と北の新地の藝妓さんで、荒五郎さんのお孃、此方の旦那の氣に入つて受け出されて閑はれて居りましたが間もなく御新造が死んだので、今ぢやア此方へ乘り込んで二度目の御新造、玉造の親分は巷

屋の娘さんの一件から、忽ちに評判が惡くなつたので、一旦大阪を立退いて何處へか往つて居りましたが、再び此方へ歸つて參りまして當分御當家に泊つてお在なさいますと、斯う云ふ話、段々考へて見ると、お係りと云ふのは岡田與四郎殿、旦那は入牢間もなく牢死、どうも缺所になると云ふのは重いことで、重罪の科でなければせぬ筈、コリヤ何うもお孃さん貴方の喧嘩一件から起つた事で、其の鈴木さんとやらの復恨が根になつて出來た仕事でございますせ』と云ふ直次郎の長物語り、お仙は 仙『成程』と 眦をキリ〳〵と釣上げ 仙『是には何か深い入組んだ事があるに違ひない、何とかして親父さんの讐を討ちたい』と云ふ、直次郎は程なく暇乞をして歸つて仕舞ひましたが、其晩にお仙が母親に向つて 仙『母親さん彼の荒五郎が與力の岡田與四郎の家に居るさうです、其の與四郎の女房と云ふのは荒五郎の娘ださうでございます、あんな丈夫な親父さんが牢に入つて三日目に牢死すると云ふのは、何うも私は合點が行きませぬ、親父さんも信心者、私も是から天滿の天神樣へ信心をして、尤もお構ひ中ですから晝間は行かれませんから、夜參りをして御利益を頂いて、親父さんの無念を晴さなければなりませぬ、生命に換へても人を助け、情を施した親父さんが、斯んな非業な御最後を爲さると云ふことはありませぬ』母『オ、ほんにさうや、是れから一同で神樣に縋る外はない』ソコでお仙が大阪へ夜になつて這入れるやうに刻限を計つて堺を出て、天滿天神樣へ夜

詣りをして立歸つて參りまする、如何なる風や雨の日でも缺かさず、毎晩參詣に行きまする
が更に疲れた樣子を見せぬ、實に孝行娘でございます、丁度八月二十五日は天神の緣日、今
夜は平生より遲く堺を出掛けやうと云ふのは、緣日の宵の中は賑かですから、天滿で萬一知
合にでも出會ひますと、お構ひ場所に立入つたと云ふ面倒の起るを氣遣ひ、堺を遲く出て天
神へ往つた時は丁度御詣への刻限で、モウ緣日商人は引けて仕舞ひまして、チラホラ夜詣が
ある位で、天神へ來てお百度を踏んで居ります內に夜が更けてシンとして仕舞ひました、是
れから明方までには堺へ歸れますから、今しもお仙が歸途裏通り南町の方へ出て參りまし
た、平常は通る道ではございませんが、何うしてか今夜は此處を通る氣になりました、廿五
日の月が今しも昇つて斜めに光りが射して居ります、何の氣もなしにヒョイと見ると門の柱
に岡田與四郎と云ふ門札があります、思はず足を留めてお仙が、偖は親父さんの係りの彼の
岡田與四郎の邸は此處だな』と立止りハタと邸を睨んで居りまするとと彼方から ○『オホ、、
……アッハ、、……』と男女の笑ひ聲が聞えて段々近寄る樣子、認められてはならぬと黑
堺の此方に幸ひ大八車がありますから、其の車の後方に蹲踞で豫て用意の懷劍に手を掛けて
何者か知らんと樣子を窺つて居りますと、間もなく其の五六人の者が岡田の邸へ這入つたか
と思ふと、男衆が出て來て門をドーンと締めました、行過ぐる樣子を確に見屆けたるお仙

大八車の後からノッコリ現はれ出で 仙『偖は
彼の武士こそ岡田與四郎、一緒に來た老爺は
恨みある荒五郎、家內の話聲が手に取るやう
に聞えるがハテ何か此處で手掛りを聞出すこ
とは出來ぬか知らん、今日は天神樣は御緣日、
私が圖らず平常通らぬ此裏町へ、ブラ〳〵と
掛つて來たと云ふのも不思議、或は天神樣の
御引合せではないか知らんと霎時佇んで考へ
て居りましたが、たゞ見ると岡田の家構へは
高さ一丈二尺位もあらうかと思ふ立派な黑
堺、女ながらも小力あるお仙は、今の大八車
の方角を變へて黑堺へ立て掛け、兩輪に齒止
めの石をかつて其車を梯子の代りにして、見
越の松の枝に手を懸け堺の中にヒラリと飛下
り、ドン〳〵飛石を傳つて兩戸の所に來て見

ると、右手に手洗鉢其の傍に葉蘭が生繁つて居ります故、是れ屈強と其處へ踞んで暫く家内の樣子を窺つて居りましたが、人の來る模樣もございませんから、手洗鉢の水を兩戸の溝へ注ぎ戸に手を掛けて開けると、まだ締りがしてないと見えて、スーッと音もせずに開きました、中は眞暗、窃と這入つて又た戸をスーッと締めまして手探りに樣子を探ると、葭戸が手に障りました、建付の宜い家ですから葭戸は音もせずにスーッと開きました、大膽にも中へ這入つて四邊を撫で廻すと、何も障るものがございません、窃と其葭戸を開けて深く這入つて往く、併し立て歩くと何うしても足摺の音がしますから、忍び者は必ず這て歩く、餘程這つて來ますると手に障つたのは唐襖、此處は與四郎の居間と並んで居ります座敷と唐襖の境になつて居るらしい、お仙は其の唐襖の際に小さくなつて隣座敷の樣子を窺つて居りますると、今しも與四郎の着換へし着衣を女房のお玉が側で疊んで居る樣子『玉』貴方まア大層衣服を汚しなさいましたね、此んなにお酒の汚點……』與『衣服を汚すのを遠慮して酒が飲めるもんぢやアない』嚏て衣服を着換へて仕舞ふ 與『土産があるからお玉モウ一杯燗けろ』玉『ハイ……』荒五郎が 荒『どうも旦那樣存外今日は御馳走樣になりまして恐れ入りました……お玉今日は旦那樣のお供で北新地へ往つて幇間や藝妓を上げて大陽氣、江戸に近々往くと云ふので俺は一座のお客、久し振りで昔の荒五郎になつた心持で駄々羅大盡……誠に有難うございま

した』與『イヤ、なんだノ貴樣もいよ〳〵、兩三日中に立つと云ふことにするが宜いノ、夫までには立派に支度もしてやらうし、又路銀も多分に持たしてやらうから、江戸に往つて一旗揚げるが宜いノ』荒『有難うございます……何しろお玉や俺は轡屋が彼アなつたので、どの位心持が好いか知れやしねえ』玉『旦那樣轡屋に居た浪人者二人は、どう云ふ刑狀のある惡黨でございます』與『彼の浪人か、彼は善人か惡人かマダ調べて見はせんから分らねえ』荒『ヘエ、何うして轡屋を牢に投り込んだのですか……』與『轡屋の入牢か是れと云ふ廉もないから、彼の浪人の事に託つけて召捕つた所が、五郎左衛門が兎や角と申譯をして口を開かぬのを幸ひどうせ貴樣の意趣返し外に罪のある譯でないから、有無を云はせず打込んだのさ、隱匿つた浪人は善人でも惡人でもそんな事は構やしねえ』荒『ヘエー左樣でございますか、彼の轡屋と云ふ奴は恐ろしい頑丈な老爺でしたが、人間と云ふ奴は脆いもんですナ、僅か三日間で牢死するとは……』與『箆棒め彼の丈夫な老爺が當り前で死ぬもんか、彼の牢痢しを掛けたのよ、御奉行が新役だから何でも俺の命令次第、チョイとやつたのよ』荒『ヘエー牢痢しと申しますると』與『貴樣も玉造の荒五郎と云はれた者ぢやアねえか、其位の符調は知れさうなもんだ、一服もつたのよ』荒『ヘエー』與『斯んな話は滅多にやア出來ねエ、マア今はお玉と三人だから宜いが、實は俺が云ひ付けて牢番に一服盛らしたのよ、俺が意趣返しをやつたのさ、貴樣もさぞ

心持が宜からう、サア〳〵飲め〳〵』唐紙の此方に聞いて居りましたお仙は、腹の立つまいことか目背をキリ、ッと釣り上げて歯噛みをなし 仙『さては老爺の牢死は此の岡田與四郎が毒を飲ましたのか、汝れ憎い奴、此の儘に生して置くものかと、懐剣の柄へ手を掛けて思はず立上りました、尚様子を窺つて居りますると差しつさゝれつ與四郎グタ〳〵に酔つて 與『俺はモウ寢るお玉床を取つて呉れ』玉『ハイ畏こまりました』荒『イヤどうも旦那様誠に大酩酊、ドレ私も二階へ往つて伏せりませう』與『イヤ二階へ往かずと宜い、其處へ寢るが宜い……お玉其處へ荒五郎の床をとつてやれ』荒『イエ私は二階へ參りませう、此處は明日又お客様でも來ますと、朝寢をして居ることが出來ませぬ』玉『親父さん私が二階へ連れて往つて上げませう』下女に雪燈を附けさせ、お玉が荒五郎を扶けて二階へトン〳〵上つて參りました、やがて寢床を敷いて寢さして來たと見えて、お玉は二階から降りて參ります、荒五郎はモウ十二分に酔つて居りますので、直ぐに睡つて仕舞つた様子、お玉は與四郎が能く眠つて居りますので別に寢床を敷いて、是も遲くなつて勞れて居りまするから、スヤ〳〵眠つて仕舞ひました、始終の様子を唐紙の此方から覗いて居りましてお仙は、寢息を窺つて、ヤヲラ立上り、仙『己れ大悪不敵の岡田與四郎天滿天神の御利益を以て、今宵の話を聞いたからは父の讐、此儘に生して置くべきや』固より度胸の据つた大膽なるお仙、襖を開いて寢間に忍び込み、

十二分に食ひ酔つてグッスリ寢込んで居ります與四郎の上に跨り、豫て用意の懐剣を引抜き神免重助の仕込みで腕は十分呀えて居りますゆゑ 仙『ウーム』と一聲、岡田與四郎の喉笛を目蒐けて 仙『親の讐』と口の内、手元も狂はず一突にグッと突込む

與『アッ』と云ふ聲さへ揚げることも出來ぬ、お仙は尚も雙手に力を籠めて抉り立てたから堪らない與四郎は手足を二三度、ブル〳〵と悶いたが、遂に其の儘ガックリ往生、お仙は懐剣を拔取り心静かにお玉を揺起すと 玉『アイ何デ……』ヒョイと目を開いて見ると見馴れぬ女、目背がキリッと上つて血の滴る懐剣を胸の上に翳して居ります、ハッと驚いて起き上らうとしたが、胸元に懐剣がありますから起ることが出來ませぬ 仙『聲を立てなさるな貴女のお命までは、お貰ひ申さぬ

併し殊に依れば頂かねばならぬが、今しも御話のあつた長堀南詰の穀屋渡世、巻屋五郎左衛門の娘お仙でございますぞ、能くも寃罪の父を入牢さした其上に、牢病しと云ふ毒薬で殺害されたな、夫で御役人の勤めが立つものか、御身の御亭主の命は美事頂戴致しました、私は固より命なきものと覺悟の前、續いて二階の荒五郎の御命も貰はねばならぬ、とは云ふものの私の父へ毒薬を飲ましたと云ふことは御身は勿論、荒五郎殿も話がなければ御存知ない模樣、樣子は殘らず襖越しに聞取りました、サア此處に硯もあるゆゑ全く與四郎殿が舅、荒五郎殿の意趣を窃に返さう爲めに、五郎左衛門を毒殺して缺所にしたと云ふことを、假名書なりとも認めなすつて下さいまし、御不承知なら御身の命も貰つた上に荒五郎殿も生かしては置きませんぞ、親御の生命も御身の御返答次第如何で御座る』と忍び聲なれど其の眼付の恐ろしいこと、度胸の据り加減はナカ〳〵尋常の女子ではございません。

（第二十七席）諏訪安房守お仙を取調べの事、並に隼太再び有善の道場へ歸參の事

素とお玉は教育はなし、殊には北の新地の藝妓で叩いた浮薄の育ち、斯くと聞いて急に怖氣付き、且つは親父を助けたい一念 玉『それでは貴女の仰しやる通り認めますゆゑ、何うぞ生

命だけはお助け下さいまし』と云ふのも震へ聲、左らばとお仙は行燈の光を掻立て、硯と紙をお玉の眼先きに突き付け、假名にて夫與四郎が毒殺の次第を事細かに認め、お玉と云ふ名前の下に拇印を捺させ年月日……巻屋五郎左衛門殿お娘お仙殿と、宛名を書かせて之れを受取り懐中へ納めた時は、丁度夜が白み掛りました、長居は無用とお仙は早くも庭へ飛下り、椽の下の手洗水で血汐の手を淨め、衣物へも血潮が着いて居りますが、固よりそんな物を洗つて居る暇はござりませぬ、松の木へ登つて以前の如く、大八車を傳うて往來へ飛下り、車の歯止めの石を拂つて、以前の通り片付け、夫から堂島の神免先生の所へ駈けて來まするとも早く、今しも戸締りを開けて是から戸外へ、ブラ〳〵遊歩に出掛けやうと云ふ所へ、お仙が息を切つて駈付け 仙『オー先生樣』重『お仙か大分早いな』仙『イエ私は今親の讐を討つて參りました』重『何を親の讐……』仙『ハイ父を毒殺した岡田與四郎を討取つて參りました、委細の話を一通り聞いて戴きたうございます……』重『此方へ上れ』とお仙を座敷へ上げて委細の話を聞いて神免老人は歯嚙みをなして岡田與四郎の非道を憎み 重『大阪の與力とも云はれる者が、何の科もない町人を殺すと云ふのは非道千萬、其身の恥のみか詰る所は征夷大將軍の御威光にも係はる、よし左う云ふ譯なら幸ひ岡田與四郎の勤めて居る方は西方で、今月は東

方の諏訪安房守が月番ゆゑ、早速其方を召連れて此の趣きを訴へやう』ソコで神免先生が御自身に御訴狀を認め、お仙にも朝飯を喰べさせて、是からお仙を召連れて東の町奉行諏訪安房守へ訴へて出ました、安房守殿は何事か知らんと訴狀を御一覽なさると、町人の娘が西の町奉行の與力を殺したと云ふ一大事、吃驚して直ぐと白洲をお開きに相成り、重助とお仙を白洲に引入れて、安房守殿御椽側へ御出座遊ばし、逐一御尋問になりますと、元來膽玉の据つたお仙、滔々として一點の淀みなく、有りし次第を申立てました、兎に角お仙は免すべからざる刑狀がありますから其の儘留置になり、重助だけはお下げになりました、夫れから直ぐと相役小田切土佐守の所へ御照會になりました、此方は岡田與四郎の邸ではお仙が歸つてから、お玉が二階へ上つて荒五郎を搖起し、良人が轡屋の娘お仙の爲めに切殺されたと云ふことを話しますと、召使ひの男女は申すに及ばず近邊の與力同心達も、段々集つて來まして上を下への大騷動、是も町奉行小田切土佐守へ訴へて出ました、其内にモウ諏訪の方から小田切へ照會がありまして、相談の上檢視も濟んで、吟味致しますと全くお仙の申立通りに相違ございません、死骸は假埋葬を云ひ付けて、是からお玉と荒五郎並にお仙と重助の四人を突合せ吟味になりますと、お玉がガラリと引繰返つて『良人を殺害した懐劍を以て私に迫りました故、心にもなき事を認めましたが、決して良人與四郎に限つて、左樣な横道を致す

筈はございません、五郎左衛門と云ふ町人が、罪深き浪人を隱匿ひましたゆゑ、良人の係りで取調べ中、圖らず牢死致しました次第、此娘が親の惡事も顧みず、夫與四郎を恨み、夜陰に忍んで殺害致すとは鬼か蛇か、云はうやうなき惡黨でございます、係りの役人が惡人を調べたからと申して恨まれましては、與力同心は始終殺されなければなりませぬ、彼娘は良人の仇どうぞお上のお手で、良人の無念を御霽し下さいましと、言葉巧に云ひ募つてナカ〳〵實を吐きませぬ、サア水掛論、其時に諏訪安房守殿、女の恥を知らぬ强情者、理解の分る筈もないと思案を定め、其日は一先づ取調べを中止して、翌日お仙とお玉の兩人をのみお呼出しになりました、兩人は白洲へ出て見ると、何だか知らないが砂地に火をカン〳〵起して、其の中に鐵箸が押込んでありまして、其傍に神官が兩人烏帽子直垂と云ふ扮裝で控へて居る御白洲へ神官が出ると云ふのは可笑な譯、やがて諏訪安房守が御出座になりまして『轡屋四郎左衛門の娘お仙、岡田與四郎妻お玉、兩人の申す所右と左にして更に相分らぬ、乃公共も何れが理か何れが非か當惑を致す、日本は神國なるに依つて、神の力を以て今日は雙方の理非の取調を致す故左樣心得ろ、此處へ召出したるは天滿天神の神職、抑も天神は無實の罪にて難澁なされた神ゆゑ、寃罪か有罪か神力を假れば相分る、天神の祕密の祈禱、火起調べを申付ける』往昔は火起調べ湯起調べと云ふことをやつたものと見えます、湯起し調べと云

ふは熱湯の中に兩手を突込んで、不義の有無を糾すので、火起調も其通り、身に惡事の覺なき者は、假令燒箸を握つても、更に燒爛れると云ふことは御座いませんが、身に詐りあるものが握る時は、忽ち兩手爛れて此世からなる地獄の苦しみを受けると云ふ軈て神官は火起し調べを申付けまするとと、神官は高天原か何かを唱へながら、眼をつぶつて九字を切り、さうして火の中から眞赤に燒けて居る鐵火箸を取出して、神官がスーッと扱きますと、只プーッと煙りが立つ計り、又一人の神官も其通り鐵箸を扱くと、是れ又プーッと煙が立ちましたが、掌を開けて見ると何とも御座いませぬ、時に諏訪安房守が正座から立つて、ッカ〳〵下

りて參りまして　安『此安房守は長く大坂町奉行の職を勤めて居るが、是まで只の一度も賄賂依估の裁判をした覺えはないぞ、イザ神力の公明なるを示すであらう、お仙お玉見ろ』今度は諏訪安房守が眞赤になつて居ります鐵火箸を取出して、キュウ〳〵と扱いて掌を開けて　安『此通り何ともない、お仙其方は與四郎を切害して人命を斷つた大罪人、其方から先へ此燒火箸を握れ、全く與四郎が惡意を含んで五郎左衛門を毒害致したに相違なくば、決して負傷する筈はない、萬一負傷するに於ては其方の曲事たるべし、早く握れ』神官が眞赤になつて居ります鐵火箸を、濡雜巾見たやうな物を以てお仙の前へ出しました、當り前の女に斯んな物の握れる譯のものぢやあないが、お仙は固より生命を拋つて居るので御座いますから　仙『有難う御座います』と其火箸に兩方の手をかけてキューと扱きまするとと、煙がプーッと立ちましたが、別に火傷の障りも御座いませぬ　仙『斯の如くで御座います、妾は僞りは申しませぬ』　安『與四郎の妻お玉、今度は其方が之を握つて見ろ』と眞赤になつて居ります火箸を、お玉の前へ出し　安『サア握らつしやい』お玉は眞蒼になつて震へ出した、と云ふのは與四郎は全く醫屋に毒藥を服まして殺したに違ひない、と云ふ話を聞いた、その晩に與四郎が殺されたので御座いますから、此燒火箸を握れば忽ち火傷をするに違ひないと、斯う思ひまして　お玉はガタ〳〵震へながら　玉『恐れながら申上げます、此お仙には罪は御座いません、與四郎が

殺害されましたは自業自得、妾は良人が殺されますと其少し前に、良人から聞いたので御座いますが、全く荒五郎の無念を晴さう爲めに、轡屋五郎左衛門が浪人を隱匿ひましたを落度に取つて召捕りまして、其浪人の身元が分りませぬのを幸ひ入牢を申付け、牢内で毒殺したに相違御座いませぬ』と云ふ白狀、早速荒五郎を呼出して　安『其方の娘お玉は、良人の惡事を白狀した其方も早く白狀を致せ』荒『ヘエー』安『コレ云はぬか、言はなければ石抱を申付けるぞ、早く云へ上へ御手數を掛けるか不屆者め』荒五郎も據ろ御座いませぬ、申上げますと茲で轡屋五郎左衛門を牢痢しに掛け、毒殺致したと云ふことを與四郎から聞きましたと、白狀して後　荒『夫にしても日本の神力は恐ろしいもので御座います、火起調べとやらは何う云ふもので御座いませう』時に諏訪安房守はお笑ひなすつて　安『コレ能く考へて見ろ、神の力を借りて裁判をするやうな事で、町奉行が勤まるか苟くも安房守は左樣な事はいたさぬ、其方の娘は剛情にして恥を知らぬ痴者、水掛論になつて善惡を裁くに手數が掛る故、斯く申す安房が計略を用ゐたのぢや、是なる神官は我が同心である……大儀であつた裝束を取れ』

同『ハヽッ』烏帽子直垂を取除けますと、神官と思ひきや同心になつて仕舞ひました　安『此火箸は誰が握つても火傷は致さぬのぢや、此の炭に仕掛けがあるので炭は卽ち桐炭ぢや、シテ此火箸には樟腦を引いてあるので、赤く燒けて居るやうであるが、扱いても些とも熱くは

ない、能く手品師がやる仕事ぢや、アハヽアハヽ……』とお笑ひなされた、荒五郎齒噛みをしたが何うも仕方がない、ソコデ荒五郎お玉の兩人は入牢申付けられ、お仙と神兎重助を御呼出しになつて出牢の上お預け、尙神兎重助にお向ひなすつて　安『轡屋五郎左衛門方に逗留をして居た浪人兩人と云ふ者は、何う云ふ者であるか其方存じて居るか』重『申上げます其者は私が賴んで轡屋へ預けました者で、上の御家人鈴木主水同人家來平賀佐平治、大久保加賀守殿の御免許を得て父の讐を搜し廻つて居ります者、大阪にて讐きを討ちます心得なれど私道場に置きましては、人出入が多う御座います故、萬一讐と狙ふ者に氣取られましては不都合と存じ、門弟轡屋へ事情を明して預けて置きました、然るに其讐は江戸で討ちまする方が便利のやうで、主水佐平治の兩人は江戸表へ向つて出立致しました、是は江戸若年寄へ御問合せになれば直ぐに相分ります、決して不審の者では御座いませぬ』と申し立つたので、轡屋が隱した浪人の素性が確かに分りました、是から轡屋五郎左衛門を缺所にした一件に就て缺所の書上げを段々取調べた上、泉州堺の竹田屋に同居をして居る、五郎左衛門の伜藤次郎を御呼出になりまして　安『缺所當時の在金諸道具は斯樣な品か』と云つてお尋ねになりますと、大層品が違つて居りまする　藤『イエそれは大きに相違致しまする、金子の在高は幾ら幾ら殊に親父は道具好きで此の外に斯う〳〵云ふ品もありました』と云ふ缺所の書上げとは天

地の相違、品物は甚だ少ない、ソコで役人が岡田與四郎方へ出役になつて、土藏から穴倉を調べて見ますると、藤次郎の申上げた通りの品物が、岡田の土藏穴倉から悉く出まして、いよ〳〵それで岡田與四郎は以ての外の大罪人と定まり、結局殺され損、お玉荒五郎は大阪三郷お構ひ、岡田與四郎方には澤山の金子もありましたが、モウ品物が出た以上は、金子も矢張り横領したものと見做されて、藤次郎が申立つたゞけお遣はしになり、餘金はお上へお取上げになりました、金子品物は殘らず藤次郎へ戻つて以前の通り一家を成した、此時代は元祿以前の事でお仙は全く親の讐討をしたに相違御座いませぬから無罪、神免重助にはお構ひなしと云ふことになりました、後に此お仙は神免重助の媒合で、平賀佐平治の女房に相成り平賀佐平治は主水より舊尾張邸の前、本村の組屋敷、御先手頭三枝金右衛門の組下の同心株を買つて貰ひまして、同心になり追々〳〵出世してナカ〳〵御役に立つた人で御座います、是は後日のお話、大阪の一件は一時是で落着を致しました、お話變りまして此方は尾州犬山成瀬遠江守の家中に、義世流の指南をして居る尾崎有善、主水が讐討に出立してから少しも音信が御座いませんので、就中娘のお絲は大層心配して居りますと、主水の所から書面が屆きました、作州津山に乘込んで讐筑波三平に出會ふまでになつた、所が圖らずも却て自分が讐と狙はれ、町奉行橋本藤左衛門の加擔からして、既に一命も危うかりし所を、お玉ヶ池の先生

の御子息秋月右衛門樣のお助けで、大阪まで立ち歸つたが、讐は江戸表へ向ひし故自分は江戸表へ罷越す、左樣御承知下されたいと云ふ手紙、讐討の屆かぬのは殘念なれど、九死を遁れて一生を保つたと云ふのは、主水が神の助けを得た譯、斯くなるからは遠からず敵討も出來ることだらうと、お絲もお安も聊か心を安んじて居りますが、何分にも尾崎有善は年老ッた爲めに、身體が弱くなつて五日に一遍位ゐ眩暈がして今日は稽古が出來ぬとか或は念の入つた風邪を引いて、三四日稽古が出來ぬとか、兎角休み勝ちになります、劍術修業盛かりの成瀬の弟子は、寄り〳〵相談をして　甲『時に尊公どうも此頃のやうに先生が病氣で、休み勝ちでは張合がないぢやアないか』乙『左樣さ、今迄は師範代に鈴木主水、島本隼太の兩人が居られたから、先生が病氣でも寔に好都合だつたが、其主水は居らず島本隼太は先生の不興を蒙つて出入差止めだから困るナ、此頃は碌に竹刀も持やアしない』甲『何しろお互に叩き遣つても上達はしない、島本は何も先生に遺恨のある人ぢやアなし、只鈴木主水に對してア、云ふ心得違ひをしたまでの事、其主水は今居ない人だから一同揃つて先生に縋つて、島本隼太を以前のやうに、道場へ師範代として出入をさせうぢやアないか』乙『ウムせめて島本だけでも居て奥れゝば好都合だから、一同で先生へ縋らう』と門弟共の方に於ては遂に相談が一決いたします、夫から門弟が打揃つて尾崎の處へ來て、島本隼太を以前のやうに、出入を許して奥

れと云ふ賴み、隼太も成瀨の御家來、門弟も皆成瀨の若侍で御座いますから、有善先生も此賴みを容れないと云ふ譯にも往なくなりましたので、シブ〳〵以前の通り道場へ出入を許しました、夫れから有善先生を助けて隼太が、代稽古をする樣に成りました、スルとお絲は又心配　糸『お安や又嫌な隼太殿が道場へ出入をするやうになつて困る、一遍彼の隼太殿を妾に配偶せると云ふことを、父上樣がお仰しやつた事があるから、又そんな事でも云ひ出しやアしないかと、妾は氣になつて仕樣がないよ』安『ナーニもうそんな事はありアしません、此節は隼太さんには御尊父樣も呆れて、彼樣な卑怯な者はないと仰しやつて、お出での所ですから、モウそんな事をお聞容れになる氣支へは御座いません、萬一さうしやうと云ふお言葉があつたら、妾が邪々張りますから、御安心遊ばして居らつしやいまし』或日尾崎が晩食に酒を飲みながら、お糸とお安を喚んで　有『偖てお安俺も追々身體が弱くなつて、氣が失せて來た、一しきりは大名の抱へになつて一つ出世をしやうと云ふ考へもあつたが、年を老つて來たからもう勤めは嫌だ、殿樣の御機嫌を伺ひ重役へ折屈みをするのは、洵に面倒だからお暇を願つて、生れ故郷の江戸へ歸らうかと思ふ、目黑にある田畑は此方へ參る折に、親類に預け物同樣に安く拂つて來たのだから、親類共に話をして、それを私が買戻して田畑でも弄つて養生をしたら、身體も恢復するだらう、先祖代々の墓碑も江戸にある、其處へ私の死骸は葬

つて貰ひたいから、ソロ〳〵江戸へ往く仕度をしやう、お糸も何か買ひたい物があつても此方で買ふな、犬山で買ふよりも江戸へ往つて買つた方が善い物が手に入る、不用な物は段々片付けて、眼に立たぬやうに賣拂はう、只困ることは老人の慾で金を殖す爲め貸金をしてあるが、今更考がへて見れば金を貸して利を殖すのを喜びとして居つたのは侍の道でない、併し損をするのも詰らないから、貸付けた金は眼立たぬやうに取付けて、モウ新規に貸付けることは止めにして元金だけでも取立てたら、體好く御暇を願つて江戸に立歸ることにしよう、併し此事を門弟に知られてはならぬから、お前方が其積りで內々支度をせよ』安『さう云ふ思召しで御座いますか、所で先生島本さんを御養子になさるやうなことは御座いますまいネ』有『どうしてア、云ふ了簡違ひの者を、養子になんぞするものか、お安俺は知らぬ顏をして居るが、娘は主水と行々はと云ふ誓ひをして居る樣子、みだらな事こそしないが其事は其の方も辨へて居るだらう、心願成就の上はお糸は主水の妻に遣はす了簡』お糸は嬉しさと耻かしさで、上氣してパッと顏を赧めて居ります、お安もお糸と主水を夫婦にさせると聞いて共共喜び　安『シテ先生樣私から伺ひますのも可笑な譯で御座いますが、此尾崎家の家督は誰が繼ぐので御座います』有『尾崎は元と目黑の鄕士で、俺は養子だから尾崎は立てぬでも宜いやうなもの、併し潰したくない、主水とお糸の間に子供が出來たら、總領は家督取り次男三男

が出來れば、其内の一人に尾崎家を嗣がせさへすれば宜しい、萬一不幸にして夫婦の中に子が無かつたら、尾崎家へは養子をして然るべき者に嗣がしても宜しい、世の中のことはさう精かに考へて居られない、凡そ人間の一生と云ふものは夢のやうなもの、さう陰氣な話になつては酒がまづい、マア俺の腹はさうだ」と云ふ、後は餘事の話をして、鏈て其の晩は寢て仕舞ひまして、翌日からお糸もお安もボツ〳〵片付け者をして不用な者は賣拂ひ、尾崎も誰が金を借りに來ても最早貸しもせず、貸した金は段々取集めて體よく御暇を願はうと云ふことを聞出した島本隼太、豫て焦れて居るお糸、見れば見る程絶世の美人、矢も楯も堪まらず附けつ廻はしつ口說いて見たが、主水に情を立つて一向聞容れませぬ、ソコで戀の遺恨から隼太が、尾崎有善を殺害致し、又主水が其仇討の後見をしなければならぬと云ふ、いよ〳〵犬山椿事の講談に移りまするが、此島本隼太の考へでは、其以前師匠の氣に入つて居る時分、自分をお糸に配偶して尾崎の家名を相續させる、してお前の家は伯父の島本清兵衛に、男の子が三人もあるから、其内の一人に其方の家の家督を繼がしたら宜からうと云ふ誠に何うも結構なお話しゆゑ、宜しく賴むと其手筈をして居つた所が、それつきり話が中止になつて仕舞つた、よもやに引かされて隼太も、未だ獨身で居るので御座います、此方は何うでも宜いやうなものゝ、追々尾崎は老る年でもあるし、別して此節は病氣勝で居りますから、一日も

早くお糸に養子をして、尾崎の家督を讓つて有善は隱居しなければならぬのは眼に見えて居ります、其上此節は隼太が萬事取仕切つて、代稽古をして居るので御座いますから、今日は養子の事を云ひ出すか、明日はお糸と盃をさせやうと言ひ出すか知らんと思つて居りますが一切口を切りませぬ、と云つて自分から偖先生、其の以前御話のあつた手前養子の事はと云ふのも變な事ですから頻りに考へて居る、或日隼人は伯父の島本清兵衛の處へやつて來て

隼「さて私はモウ是れ今に三十歳になります、今女房を持たなければ跡が絶えないとも云はれない、斯くては先祖へ對して相濟まぬ、貴所も御存じの通り先年師匠から私を養子にしやうと云ふ話もありましたが、何う云ふ都合か、それつきり一向何の御沙汰も御座いません、マア急いで急がぬやうなものですが、話が極つて居なければ私も氣になりますから、貴所折があつたら尾崎先生に、夫となく相談して見ては下さいませんか　清「それは俺も聞いて知て居る、成程彼の儘打捨つて置くと云ふのは先生にもお似合なさらない事だぢやア、俺が今日は丁度非番だから是から往つて聞いて來やう、歸りには其返事を聞かせるから、お前は自宅に待つて居なさい」清兵衛は誠に良い人間、何事も實體に働く人物で御座いますから、直ぐと尾崎の道場へ參りますと、先生は丁度門弟の稽古を仕舞つて、今茶を飲んで休息して居ります所　有「ヤ是れは清兵衛殿能くお出でなすつた、サア此方へ〳〵何か用事かな」清「先生外ち

やア御座いませぬが、甥の隼太も追々彼の通り立派な男になり、豫て御娘子の御養子にと云ふ話もありましたが、何日頃御披露をなさる御見込みで御座いますか』有『イヤ夫だて清兵衛殿、拙者が當家へ住込んで弟子の取立てを始めた時分には、隼太は寔に柔和で腕筋も宜つたから、お糸へ娶せやうと云ふ話もしたが、偖て其後は兎角惰け勝にてお聞き及びか何うかは知らんが、江戸表から此方へ來て修業中の、主水と競爭をして負けた口惜しさに、罪のない主水を殺害しやうと云ふ、惡心を起した事もある、誠にハヤ氣に入らぬ振舞ひ、ア、云ふ者を養子にすれば拙者が老人になつた曉には、手當世話が自然と邪慳であらうと斯う思ふと誠に賴母しくない、清兵衛殿其養子の話はまだ確と極めた譯ではないから、更に破談、どうか隼太には御自分のお目鏡で、好い女房を持たしてお遣りなさるが宜い、私も劍術指南番はモウ老人にはなるし、根氣は盡きて出來兼ねるから、勤めを辭さうと思つて居る矢先、此上道場を盛らして貰ふは有難迷惑、以來は餘り隼太に出入をさせぬやうに言付けて呉れ大きに御苦勞、サア お茶でも上れ』と云ふ挨拶、伯父の清兵衛も氣が拔けて仕舞つて 清『ヘエー何か外に當人に不都合でも・・・』有『サア其不都合は當人の胸に問へば破談になるも無理はないと斯う思ふであらう、何しろ其の話は取消しだ』流石正直の清兵衛も極りが惡くなりましたから、コン〳〵告別をして顏を膨らして歸途、隼太の所へやつて來て 清『隼太何だか知らな

いが、俺は先生に使取扱にされて歸つて來た』隼『ヘエー何う云ふ話で・・・』清『先生の話は斯う〳〵大儀だから勤めを辭す所存、以來は道場へ出入をして呉れるな、何かお氣に入らぬ事がと聞いたら、夫は當人の胸に聞いたら、成程破談になるも無理はないと合點するだらうと云ふ挨拶、お前何を失策つたんだ、鈴木との勝負一件は那れはマア若い者の常、荒い心の出るも無理はないと思ふが、あれで失策つた譯でもあるまい』隼『何にも私が目立つて其後先生の機嫌を損ねた覺えはございません』清『覺えがなくばモウ一度俺と一緒に往け、一旦約束した事を反古にするは、武士に似合はない卑怯な言葉、表裏反覆是から二人で往つてモウ一度談判しやう』と隼太に勸めた。

（第二十八席） 隼太師匠有善を殺し金品を奪ひ取る事、並にお糸お安江戸表へ出立の事

隼『イヤそれは止しませう、さう云ふ譯で御座いますなら貴所と私で往つて、若し議論が高まれば、互に赤い面もしなければなりますまい、夫こそ出入も足踏も出來ぬやうになるかも知れぬ、何うも先方が非で此方が理であつても、師弟の間柄爭ひをすれば、自然家中の思惑が惡くなります、尾崎先生は日頃不意と腹を立つ方ですから、何か思ひ違へて居るので御

座いませう、宜しう御座います、私の考へでは二十五石でも島本の家に生れたからは、島本の家督を相續して立派に成つて見せませう、夫が人の道です、高が多いからと云つて、尾崎の養子にならうと思つたのは不實な譯、何うか貴所の御目鑑で私に好い女房を持たして下さい、手前も是から一生懸命、島本の家名を盛んにして見せます積り、其中には先生のお心の解けることも御座いませう、尾崎の養子が中止になつても、家中の指南番の株を手前が讓受ければ御加増も出來やうかと思ひます、伯父上其の方が氣が樂ぢやア御座いませんか」

蕎『ウム〳〵それもさうぢや、さう云ふ了簡ならマア是から一生懸命やんなさい、俺も好い女があつたら心掛けて置くから、ドレ歸りませう』隼『是は何うもお世話樣で御座いました』

さて隼太も面白くないから、其後は七日に一遍位しか尾崎の道場に立入りませぬ、スルト尾崎が段々要らぬ道具抔を買拂ひ、近々當家より、お暇を貰つて元の江戸の目黑に引込んで、老を養ぶと云ふ話がチラホラ聞えますから隼太が 隼『夫れならモウ仕方がない飽まで人を馬鹿にした尾崎の老爺、師弟もへチマもあるもんか、いつその事老爺の息の根を止めて金蒲家であるから在金を强奪つて、尾州の犬山ばかり日光は照ない、此の地を立退いて姓を改め名を換へて、遠い國へ往つて我腕前で何れかの大名へ住込んで勤める方が、結局當家よりは大祿を頂戴することが出來るかも知れぬ、やつつけろ……』と心得違ひの隼太、尾崎の他行を

附狙つて居りますと、丁度五月二十七日尾崎先生は家老の息子の元服祝ひに招ばれて參りました、隼太も同樣招ばれて參りましたが少々思ふ事がありますから、工合が惡いと云つて酒宴半途に告別をして立歸り、有善の歸途を待受けて居ります、亥刻半頃尾崎先生は十分馳走になり、仲間に提灯を持たして家老の家は御城内であるから城の外の自分の自邸へ歸る、其の後方から隙を計つてザックリやつつけやうと致しましたが、醉つては居るし殊に敎へられた弟子が、敎へた師匠を斬るので御座いますから、流石に氣遲れの樣子、旨く外されて引摑まりでもしちやアそれこそ一大事、用心の上にも用心をするに若かずと、此處でやらうか彼處でやつつけやうかと附け狙つて參りましたが何分にも隙が御座いませぬ、とう〳〵尾崎を邸まで狙けて參りまするとと仲間が ○『お歸り』と云ふ聲 客『ハイ』と答へて出て來たのはお安の聲、門の潛戸が開いて居ります故、尾崎も仲間も其處から中へ還入つて仕舞ひました、是は彼の袴垂の保輔が、兄の保昌を殺して 嫂を手に入れやうとたくみ、平井保昌が笛を吹いて行く處を、後方から附狙つて參りましたが、何分にも隙がなくて切れなかつたと同樣、隼太はぼんやりして 隼『此奴は可けねえ斯う臆病ぢやア迚も斬ることは出來ぬ、待て〳〵十分酩酊して居るやうだから、モウ少し刻限を計つて、グーッと眠入つた所を討てば寢鳥を討つも同樣、討てぬこともあるまい』と刻限を圖つて一時程經つた時分に、塀を乘越えて忍び

込み雨戸を二枚取外して、豫て案内知つたる有善の寢間、スーウと唐紙を開けて覗いて見ると、十分酩酊をして眠つた樣子、有善は常に臥床に入つても暫く寢就かれないので、仰向になつて本を讀んで居る中に、何時しか寢入つて仕舞ふと云ふ慣習、今宵も本を顔の上に、屏風の中でグーッ〳〵と高鼾で寢て居る所を見澄して、隼太がギラリと一刀を引拔き中へ入り、仕合せ宜しと有善の上に跨り鍔をも通れとギューッと突立てた、隼太とても腕は立派に出來て居りますから、何かは以て堪るべき、喉元から蒲團根太まで突通して置いて、尾崎のして居る枕をポンと蹴るとカーンと枕を外して、キユもスーもわりアしませ

ん有善其儘往生、仕澄したりと隼太は刀の血汐を拭つて鞘に收め、行燈を掻立て手燭にある蠟燭へ火を燈して、緩々と簞笥用簞笥などを探すと、錠が下りて鍵が分らぬゆゑ、刀の小柄で音のしないやうに鍵を外した、尾崎と云ふ人は覺悟の宜い人ですから、金を一緒の處に置きませぬ、此處に三十兩、彼處に七十兩又此方に百兩と云ふやうに、用簞笥やら佛壇やらに金が仕舞てあります、取纏めて四百八十兩まだ外にもあつたのですが、さうは隱し處が分りませぬ、刀簞笥には尾崎先生の重寶物で、其頃自慢にして居る一尺六寸粟田口藤四郎吉光の脇差、金無垢柊の定紋付鞘は臘塗になつてありまして、其鞘に柊の定紋が付いて居ります、其品を取出したがモウ一品望みの物がありますから、方々探してやう〳〵用簞笥の奥から見付け出したと云ふのは、先年尾州大納言猪狩のお催しの時、成瀨遠江守も御出ましになつた、其の折に尾崎先生が拔群の功名を顯はしたに依つて、名古屋の大守から御褒美として後藤德女の彫は格別大きくも御座いませぬが、極く性の良い金の香箱を給はりました、彼の有名な德女が刀を執つて十六羅漢を悉皆毛彫にした品で、其蓋の眞中に梵字が一字彫つてありますが、未だに誰も此字を讀んだ者が御座いませんさうで、其蓋を開けて裏を返して見ると德女作之としてあります、香は勿論入つて居りませぬが、以前名香が入つて居たものと見えて、どうも得も云はれぬ好い匂ひが致します、此品は大變な金目の品で、好事家に賣れ

ば何の位の價に賣れますか分りませぬ、其品を奪ひ取つて隼太はスーッと立退いて仕舞ひまし た、翌朝になると何時も早起の尾崎先生が起きませんので、お糸が　糸「お安や親父樣は何うなすつたんだらう、今朝は大層遲いね」安「昨夜は大分お醉ひ遊ばしてお就眠になりましたから、まだ好くお眠つてお出遊ばすので御座いませう」糸「モウお門弟がお出でになる刻限だよ、島本さんが此の節はサッパリ來ぬゆゑ、お弟子達は何時もお贅足ばかりで、誠にお氣の毒だからモウお起し申さうか」安「若しお心持がお惡いやうならば、貴娘どうぞお起し申上げて下さいませ」お糸はバタ〳〵と有善の部屋の前に來て、親父樣々々御目覺めになりませんか、召上り過ぎてお頭が上りませんなら、お迎酒の仕度でも致しませうか、お父上樣」と呼べど更に返辭が御座いません、お糸は不審に思つて唐紙を開けて見まするとこは开も如何に有善先生は血塗れ姿、算筒用算筒の錠前さへ捻開けてあつて、足も踏込めないやうに種々の物が、座敷に取散してありまして、如何にも無慘な最後　糸「アレー」とお糸は大聲揚げたので、お安が　安「何う遊ばしました」と馳付けて見ると、此有樣　安「ヤア是は大變誰か來て下さい」サア家中の騒ぎ一方ならず、ヤアお屆けしろ門弟へ知らせろと、上を下への大混雜、其中に御目付へ御屆に及ぶと程なく檢視が來て、死骸を取調べると武藝者にあるまじき最後武士の作法は六ケ敷いもので、假令遺恨で不意に斬殺されても、刀を三寸拔いて居れば家名

は立ちます、假しや刀を拔く間がなくても、柄へ手を懸けて居れば半知が立ちますが、左もなければ家名斷絶、尾崎先生は刀の柄どころではない、仰向に寢入つて居つた所を一刀に突殺されたので御座いますから、武藝者らしい最後を遂げることの出來ぬのも道理で御座います、何か紛失ものはないかと問へど、お糸は只モウ泣いて許り居て少しも役に立ちませぬ、併しお安は確りした女で御座いますから　安「只今調べました所が、金子は少しも御座いませんが、何の位取られたので御座いますか、先生は默つて居る方で御座いますから、何千兩御座いましたか確と分りませぬ、併し金子は殘らず奪られました、ソレに先生が御祕藏の吉光とやらの御脇差が一本、今一つは名古屋の大守から御拜領の品で、御酒なんど召上ります時は、御自慢に私共にまで御見せになりました、後藤德女の作の香箱がございませぬ、十六羅漢が毛彫にしてあります品で、斯う〳〵云ふ香箱で御座います、檢視役人はソレを一々書留めて、先づ是は盜賊の所業と云ふので、家老から殿樣へ申上げますると、成瀨遠江守殿は小首を傾け、何うも最後のしやうが怪しいが、兎も角打捨て置いては家中の示しにならぬ、不愍なれど家は取潰さなければならぬ、尾州公へも拜領の品を盜まれた事ゆゑ、御屆けに及ばなければならぬと云ふ事になりました、此方は島本清兵衛が隼太の所へ來て　清「隼太居るか」隼「オヤ是は伯父さん何處へ」清「お前は尾崎の大變を知らないか」隼「尾崎の大變ッて何で御

座います』清『知らんのか』隼『一向存じません』清『昨夜尾崎は何者にか殺されたさうだ 隼『へエ尾崎先生が殺されましたか、何うして』清『委しくは聞かないが、何でも賊だと云ふ話だ』

隼『へエー』清『立派に殺されたさうだ、俺は是から行くんだが、お前も知らないぢやア濟むまい、何ぼア、云ふ仲になつたつて、一番弟子ぢやないか』隼『それはどうも氣の毒な事で、ぢや直ぐ御一緒に參りませう』と清兵衛と同道にて隼太が有善の死骸の所へ來ると眼も當てられぬ死骸、尾崎の門弟は一同集つて、前後不覺に泣倒れて居ります、素知らぬ體にて隼太は取敢へずお糸に悔みを述べ、夫から死骸へ取付いて聲を放つて泣いたとは、何處まで圖太いか底知れぬ大膽不敵の曲者で御座います、軈て死骸はお糸へ下し置かれましたから、門弟一同打集つて厚く回向の上葬式を營んだ、尾崎先生の菩提寺は江戸で御座いますから、死骸を燒いて遺骨を江戸へ送らなければならぬと云ふ騒ぎ、所が初七日が濟みますと、武藝者にあるまじき不覺の最期を遂げたのは當藩の名折であると云ふので、家名取潰し娘にはお構ひなし、此の地に居やうとも立退かうとも勝手次第、領分拂ひといふ程のお咎めでは御座いませぬ、時にお糸が 糸『さてお安此の上身の振方はどうしたものだらう』安『何うも外に仕方がございますまい、お手紙を見まするとお鈴木さんは江戸で讐を討つの見込みがあるとか申されました、江戸にお出でになりまして鈴木さんを賴つて御相談を爲さる外は御座いますまい』

糸『妾もさう思ふが、何う云ふ風にして往つたら宜からうね』安『お父上樣が逝去になりましたのに、此樣な處に居ても仕樣がありませんから、お宅をお仕舞ひなすつて、お道具や何かを賣拂つて夫を路銀にして、妾も少々の貯へがありますから、二七日が濟みましたら江戸へ立ちませう』と話をして居る所へ、島本隼太が出て來まして 隼『偖て何うも此の度の御不幸萬々お察し申しますが、江戸へお出にならなくとも長く此方にお在なすつたお身分柄、御懇意の方も澤山あるのですから、何んとか御考へなすつて、此方にお止りなすつちやア如何で御座います、此の隼太も及ばずながら何處までも御恩報じに御世話を致しませう』時にお糸が 糸『誠に島本さんの思召しは有難う御座いますが、モウ斯うなつては女ながらも望みを立てましたから、當所は出立を致します』と斷つて家内の諸道具を賣拂ひ、百二十兩ばかり路銀を拵へ、尙ほ自分の衣類頭の物も澤山ありますから、不用な品物は悉く賣拂ひ、入用の物だけ一纒めにして、いよ〳〵出立の用意が整ひました、ソコで年來奉公をして居ります清助、仙吉の兩人に向ひ 糸『お氣の毒だが父上が斯う云ふ御最期を遂げて、家名まで斷絶した今日、此の地に居るのも心苦しいから江戸へ往きたい、就いては女二人で往くも心細いから此兩掛を擔いで送つて呉れる譯には往くまいか、相當のお禮をするから、固より忠實な兩人涙ながら ○『宜しう御座います、江戸までお供いたしませう』と相談が成立ちました、大山を

立つ時にお糸からして、道中關所の通行手形を家老に願ひまするとと、固より罪あつてお暇に成つた次第では御座いませんから、願ひの通り手形をお下げ渡しになりました、デ、いよ〳〵犬山を出立すると云ふ時に、先の門弟達が名殘を惜み島本隼太が先立で伏見の宿まで見送り此處で門弟衆に別れを告げて、お安お糸の兩人は二人の供を連れて、中仙道より江戸を指して乘込んで參ります、早くも信州路へ這入り輕井澤の驛へ着きまして、米屋六兵衛と云ふ旅籠屋へ泊りますと、かよわい女の身で長旅をした爲めか感冒を引いたものと見えて、お安は夜半から大熱を發して翌日は頭も上らぬ位、お糸が一生懸命看病を盡し、土地の醫者を賴んで診て貰ひましたがナカ〳〵熱が去りませぬ、兩人の若い者は知らぬ旅路の旅籠住ひ、モウ所在がなくなつて困つて居ります、尾張の名古屋とか遠州の濱松とか云ふ處なら、見る所が澤山御座いますが、信州の輕井澤では見る處も御座いませぬから厭きて仕舞ふも道理、只今では汽車の便利も開けて、盛夏の頃は避暑或は病人抔が轉地療養に出掛けますから、大層賑かな土地になりましたが、此時分はまだ少しも開けて居りませぬし、酒と云つては神代酒位、兩人の供はのつそりして居る其中、七八日經つと醫者の藥が利きましたか、お糸の看護が屆きましたか、左しもの大熱も漸く去りました　糸『どうも飛んだ御心配を掛けまして相濟みませぬ、もう悉皆宜しう御座いますから明日は立ちませう』糸『お前病氣を推して立つて、

途中で又惡くなると夫こそ困るから、此處で十分癒しておいで』安『イエもう大丈夫でございます、氣がさつぱりして參りましたから、明日は出立致しませう』ソコで宵の中に醫者の藥代旅籠屋の勘定を濟まして、いよ〳〵明日出立することになりました、お安も病氣は癒つたと云ふものゝ、疲れて居ると見えて其夜はぐつすり寢込み、お糸も看病に夜の眼も寢ないで手を盡した甲斐あつて、先づお安の病氣も癒つて明日はいよ〳〵出立と極りましたので、安心したものと見えて何日になくグッと寢入りました、翌朝早く起きて下へ往つて、嗽水洗面を濟まして女の嗜みですから、毎日の通り朝髪を撫で付けやうと思ひまして、櫛道具を出さうとすると、床の間に置いてありました兩掛の蓋が開いて居ります、ハテなと思つて見ると衣服や髪の物がすつかり無くなつて、兩掛が空で御座います　糸『お安大變だ、兩掛が空になつて居るよ』安『エッあなた、マア何うして盜まれましたらう床の下の胴卷、御覽なさいまし、見ると胴卷がない　糸『お安胴卷もないよ』安『あなたマア飛んでもない事が出來ましたね、何う致したら宜しう御座いませう』と暫し兩人は途方に暮れて居ります、何處から賊が這入つたか知らんと調べて見ると、千本格子になつて居る見世二階の窓が破れて、其窓から下に麻繩に摑まつて降りたのか、何しろ此繩を便りに昇降をしたに違ひ御座いませぬ、下婢が之を聞いて米屋六兵衛に話すと、主人六兵衛が飛んで來まして　六『マア飛んだ御災難……何し

ろ早く訴へませう、男衆二人はまだ起きてお出になりませんか』安『アノ早起きの清助が、今朝は何うしたのだらう』供兩人は下座敷に寢て居るのですから、起しに來て見ると藻脱の殼や空蟬の影も見えませぬ、サテは兩人の仕業に相違ないと云ふ騒ぎ　六『如何致しませう、まだ左樣遠くも行きますまいから、追手を掛けませう』と云つて早足の者を賴み、途の三方へ手當をして追手を掛けましたが、盗賊を働く位の奴等ですから、山中にでも隱れて仕舞つたか、乃至間道を遁れて往つたか、程なく三方の追手が歸つて來まして、足が附かないと聞いてお糸お安の兩人が途方に暮れて居るのを見て、六兵衛が　六『何しろ緣あつて私共へお泊りなすつて、此御災難どうも見捨てゝ居られませんが、貴所方は何方のお方で御座います』安『尾州犬山の浪人』六『何方へお出なさいます』安『江戸表へ』六『江戸表へ誰方をお便りなさるので御座いますか』安『公儀の御家人鈴木主水と云ふお方を尋ねて參ります』六『ヘエ其の御家人樣はお勤人で御座いますか』安『ハイ小普請で』六『ヘエ左樣で定めし御宿所は御存知でせうな』安『其の宿所は何とか云ひました、胸にありますが急に出ません、お嬢さんあなたお覺えありませんか』糸『左樣さね何とか言つたね』六『なんですか、お聞きなすつた事がありますので』安『ハイ手紙に書いてお寄越しなすつたのですがエ、……』六『私は江戸に七年居りましたが、夫ぢやア私が江戸方角を讀むやうに方角を讀んで見ませうか、其の中でお心當りがあまりしたら仰しやいまし、先づ御家人の居りさうな所は、本所深川には御家人は餘り居ませんが深川は何うです下谷淺草吾妻橋近所は如何ですな』安『イーエ』六『ハテナ夫ぢやア兩國の方として兩國、日本橋彼處には御家人は居ないか……』安『イーエ』六『夫なら新橋、京橋、丸の内は御大名ばかりだが、小川町神田まだ出ませんか』安『イーエ』六『ハテナ夫れぢやア山の手の方を、チト云つて見ませう小石川、牛込、小日向近傍から本郷の方は如何で御座いますか』安『イーエ』六『番町は如何で……まだ出ませんか、ハテ困つたな』安『でもッヤと云ふやうな』六『ッヤ……ア、四谷ですか』安『さう〳〵其四谷で御座いました』六『夫でも困りますナ、併し四谷と知れゝば四谷中を捜したら知れないこともありますまい、ソレを便つてお出なさるですか』安『ハイ先づ江戸へ往つて骨を折つても、尋ねる積りでございます』六『ぢやア斯うしなさい、此信州の者で、私の兄弟同樣の者が江戸に出て、四谷の傳馬町に信州甲州の定宿をして居ります、高砂屋宗左衛門と申します者、是れは誠に義俠氣のある者でございますから其處へ駕籠で貴所方をお送り申しませう、其駕籠昇も女房のあります駕籠昇で、獨身者ではございませんが確かな者、駕籠賃は私が御立替申しても宜しうございます兎も角、今朝盗まれた衣類からお頭の者、之を一つ訴へて置きませう、此近傍で彼の兩人が召捕られるかも知れません、縛られたら高砂屋へ宛て、貴所方へ手紙で御知らせ申しませう』旅籠屋の主人が親

切な扱ひに、兩人は大層喜んで　安『誠に何うも御親切なことで、何分ともお任せ申します、幸ひに駕籠賃位は私が持つて居りますから、夫までのお世話は願ひませんが、夫ぢや恁うか高砂屋さんとやらへ・・・』六『今日一日逗留なさいまし、私が高砂屋へ宛て手紙を認めて置きませうし駕籠も今から跳へて置きますから、其中に訴へて若し彼の兩人が捕まるかも知れませんから、明朝御出立となさいまし』米屋六兵衛が早速訴狀を書いて其筋へ訴へまするとと其時分でも御政治はナカ〳〵行屆いて居りましたから、早速山々へ手當をして、隅なく搜しましたが其日の夕方までは、清助仙吉の兩人は捕まりませぬ、此方は手紙がすつかり出來上つて、翌朝未明に駕籠が二挺舁夫が四人、出立の用意が整ひましたので、お安とお糸は米屋六兵衛に厚く禮を述べ、駕籠に乘つて中仙道を江戸に向つて出發しました、通り手形もあります故、關所々々も差支へなく江戸に這入つて、四谷の傳馬町高砂屋宗左衛門方へ駕籠を横附けに致しました、高砂屋は大概泊る客は知れて居ります、信州甲州のお馴染の客ばかりで此家に駕籠を横附けにするやうなお客は、頓と御座いませんから、若い者がビックリ飛び出して入らつしやいまし、駕籠から出た人を見ると一人の若い美しい婦人、後の駕籠から出ましたのが娘の母親らしい年頃の女　玄『ハテ珍らしいお客だ』と思ひましたが　若『御案内を』宗左衛門も店先へ出て來て　宗『入らつしやいまし、お早いお着きさま・・・コレよ二階へ御案

内を申上げろ』兩人は下女の案内で二階へ通る、駕舁は汗を拭きながら　駕『輕井澤の米屋から通し駕籠で此方へ來ましたので、旦那是は米屋からのお手紙で』宗『ア、米六からかえ大きに御苦勞々々、高砂屋が手紙を開いて見ると、犬山の浪人で尾崎お糸、片方は娘の子供の中から抱守をした母親同樣の乳母お安、去る人を江戸に尋ねて行く途中、兩三日私の所へ泊つて居る折柄、供兩人の出來心かは知らぬが、御兩人の身の廻りの品から、所持金を悉皆盜み去られて途行が出來ぬ、尋ねて行く先は四谷に住んで居る鈴木と云ふ御家人、四谷と許りで住居は確と分らぬ故、私に成り代つて搜して面會をさして上げて呉れるやうと云ふ依賴狀、すつかり讀んで手紙を疊み　宗『若衆さん大きに御苦勞だつた、サア〳〵足を洗つて今夜はマア私の家へ泊るが宜い、明朝までに私は信州への返辭を書いて置かうから、今夜は緩くり休むが宜い、明朝になりやア空駕籠ぢやア歸れまい、又宜いお客があるだらう』駕『有難う御座います』宗左衛門が更めて二階へ上つて來て　宗『ヘエ手前が高砂屋宗左衛門で御座います米屋さんからお手紙に依りますと、此の四谷に御住居なさる鈴木さんと云ふ御家人をお尋ねなさるさうで、四谷と申しましてもナカ〳〵廣う御座いますが、折角遠方からお尋ねなされた貴所方、屹度鈴木さんを探して御面會を取持ちませう』此主人も誠に親切な男お糸主從も安心して　安『何うか何分宜しう御願ひ申します』駕籠屋には翌朝返事を持たして歸して仕舞

ふ、是れから高砂屋が八方を聞合せて見ますが、どうも御家人と云ふ者は、どの位あるか數が分らぬ。旗本八萬騎と云ふが御家人はもつと多いのでナカ〳〵分らぬ。分らないのは道理だ、鈴木主從は江戸に來は來たが、實は四谷に往つて居りませぬ、玆に一つのお話しを產み出すと云ふ一件。

（第二十九席）　お糸江戸表に於て主水の所在を尋ぬる事、並にお糸新宿橋本屋の藝者となる事

偖て翌朝になりますと高砂屋の女房が、櫛道具などを貸して呉れまして、種々親切に慰めて呉れますので、お安も賴もしく思ひながら、お糸の髪を撫付けて居りますと、高砂屋宗左衛門が二階へやつてまゐりまして　宗『さて米六は私が彼地に居た時分、兄弟同樣にした者で、彼は誠に義俠心のある男、私も人に不實をしない積り及ばずながら御世話致しませう、お尋ねなさる鈴木さんと云ふお方は、御家人ださうですが、御旗本であれば百の小身のお方でも直ぐに知れますが、御家人でお役なしとあつては寔に知れ惡い、昨晩念の爲めに武家鑑を調べて見ましたが何うも見付からない、併し四谷と云つては、廣いやうだが限りがありますから、隅々までお尋ね申したら知れないこともあるまい、マア〳〵御緩り御逗留をなさい、決して御心配には及ばぬ』　お安もお糸も心易く思ひ　糸『何うか一つ貴所のお力で、是非尋ねて戴きたい』宗『承知致しました』と宗左衛門が下に降りて來て、勇吉と云ふ下男を呼びまして『二階のお客樣の賴みだが、鈴木主水さんと云ふ御家人が四谷に居ると云ふから何うか探して呉れ』勇『宜しう御座います、一つ腕に撚を掛けて尋ねて見ませう』是れから勇吉が甲斐々々しい扮裝で探に出掛けまして、二日掛りで探して呉れましたが皆目分りません、で此譯を宗左衛門から、お糸お安に話し　宗『シテ見るとモウ此の四容には親母さんはお在がない主水さんはまだ江戸にはお歸りがない樣子、けれどもナニ、江戸八百八町と云つた所が四里四方、日本中ぢやないから聞合したら知れないこともありますまい、御家人もあれば私も一つ心當りを探して上げませうから。氣を丈夫に何日までも御逗留をなさい』と云つては呉れますが、お糸は賴みに思ふ主水の居所は知れず、犬山に於いて父が横死のことなど胸に浮びサア夫から氣が挫けて不圖惡症の感冒に罹りましたのが原因で、お糸は大病の褥に悶え苦しむと云ふ始末、お安が持つて居りました僅かの路銀は無くなつて仕舞ひ、心細さの限りがない、所が高砂屋は似た者夫婦で、主人の宗左衛門が義俠心のある男ですから、其の女房も誠に親切で能く面倒を見て呉れますのが責めてもの心賴み、お安は一生懸命にお糸の枕邊を去らず看病致して居りますが、只厄介になつて居るのも氣の毒と思ひまして、お安はお糸が疲

れて、スヤ〳〵寢て居ります間には、臺所へ出て來て下婢と一緒に、ドン〳〵臺所働きをして居ります、其年も暮れて明くる春の三月になりますと、奉公人の出替り、此高砂屋と云ふのは一體郷宿で、郷宿と云ふのは普通の旅人宿と違ふて、公事訟訴抔があつて出て來た人ばかり泊る旅籠屋だから、平素は左程客がございません、從つて下婢もたつた一人しか居りませぬ、或時女房がお安に向つて　内『お安さん此頃はお前さん、時々臺所を助けて下さるので、私共も大きに樂をして居りますが、今度あのお節が嫁に往く口が極まりましたので、暇を呉れろと云ふ、何うか跡の奉公人を見付けやうと思ひますが……』安『イヽエ奉公人は要りますまい、斯うやつてお孃さんと私が御厄介になつて居ります以上は、お節さんが暇を取りますなら、私が女中代りを致しませう』女房『お安さんお前さんはさう親切に云つて下さるがお客の込合ふ時分には中々一人では眼をまはす位、何しろ是非一人置かなければなりませんが、早速代りが御座いませんでネ』安『ナーニお内儀さん只今の所では、お客だつて澤山お出になるといふ譯でもありませんから、左う急いで下婢をお探しなさらないでも、私で間に合ひますならどうか、何なりと仰しつて下さい』内『ぢやア何しろお前さんに助けてお貰ひ申しませう、是れまで居りましたお節といふ下婢が暇を取りましてから、お安がお糸の看護の傍ら、萬事取仕切つて臺所を働いて居ります、固より甲斐々々しい女ですから、勝手向の事に

も段々慣れて來まして、今では充分間に合ふやうになりました、先のお節がやつて居ります時分より、女房が樂をするやうになりましたので、大きに喜んで居りますと、此時分堀の内の祖師が盛り始めたと云ふのも可笑いが、大層御利益があるといふ評判、只今は廢つて居りますが、往昔は雜司ヶ谷の鬼子母神樣が大層流行りましたもので、其の時分堀の内のお祖師樣が御利益があると云ふので、大層流行り出しました、豫てお安は法華宗ですから一生懸命、月の十二日には必ず堀の内へ參詣をして、お糸の本復を祈り且は些とも早く、尋ねる鈴木主水樣に廻り逢ふやうにと一方ならぬ信心、其信心の爲めであるまいけれども、お糸も長く患つて居りましたが、六月の中旬に至りますと大きに宜い鹽梅で、此節は漸く病の褥を離れるやうになりましたので、恐々床を離れて見ると別に寒氣もせず、髪を上げても頭痛も致しませぬ、何しろ血氣盛りのお糸の癒るといふ段になりますと存外恢復は早い、段々元氣も出て來ましたので、宗左衛門夫婦もお安も安心したとはいふものゝ、お糸とお安は輕井澤で清助仙吉といふ小者に、衣類を盜まれて漸く着替を持つて居る位で、誠に着物に困つて居る樣子が見えますから　宗『呉服屋を呼んで、お娘子とお安さんに着物を一枚拵へて上げやうかノ』　内『私も疾から左う思つて居たんですよ』スルと或日呉服屋が來ましたので　宗『お安さん、お糸さんとお前さんに着物を一枚拵へて上げやうと思ふが、丁度呉服屋が來たから見なさい

……』安『イヱ唯今の所で着物は別に要りませんし』宗『イヤ左うでない、呉服屋の勘定だつて何も今直ぐやらなくつても宜いんだし、どうせ私も外の物を買ふのだから、勘定の心配なんざアしないで宜い、お前さん方の氣に入つたのを遠慮なくお取りなさい、餘り内にばかり閉籠つて居ると、身體が惡くなるから偶にやア保養に出掛けなさい、ソレにしても花盛りのお娘子が、彼の裝では餘り甚いからな……』安『それでは』といふのでお糸は秩父の單物、お安も木綿の柄の好いのを見立てゝ拵へました、折しも七月の十三日盆ではありますし、堀の内のお祖師様は大層な人出、お糸の病氣が癒りましたのも、一つはお安が一生懸命祖師を信心したからで御座いますから　安『お糸さん保養がてら少し道は遠うございますが、私も御一緒に行きませうから』と云ふと高砂屋の女房が　内『お安さんお氣の毒だが、お前さんは留守居をして下さいませんか、私も久しくお祖師様へ參詣しないから、お糸さんは私がお連申しませう』安『そんならさうして下さいまし』お糸の髪を結んで、此間買ひました單衣を着せますること、一寸町人の娘らしい、高砂屋の女房も仕度をして　内『勇吉お前一緒に……』勇『ヘエ私がお供を致しませう』と三人で堀の内へ出掛けました、暑い時分ですからお糸と高砂屋の女房は日傘を相合傘、勇吉は其後から附いて參りますと、數多の信者が暑さも厭はずドンドコドンドコ團扇太鼓を叩いて參詣の老若男女引きも切らず　○『どうだい源兵衛さん七面様が背後

から來るぜ』源『何處に……』○『分らねえ奴だナ、背後から來る新造の事よ』源『成程是れはどうも素晴しい七面様だなア』すれ違ふ者が皆お糸の姿に見惚れて『ア、好い女だなア』と譽めない者はございませぬ、軈て堀の内へ來て、嗽口洗手をして本堂へ上つてお糸は心の中に

糸『どうぞ一日も早く鈴木さんに廻り合せて下さるやう、御利益をお願ひ申します』高砂屋の女房も家内安全商賣繁昌を祈り、モウ彼是晝時分でございますから、歸路に信樂といふ名高い料理屋で晝飯を喫べて、暫く休息して丁度今の二時頃、梅びしほ紫蘇びしほ抔を土産に買つて、歸りに淀橋の團子屋で又休息をして、四谷傳馬町の高砂屋へ歸つて參りました、

宗『イヤ勇吉大きに御苦勞』勇『どうも旦那、お祖師様の此の節の繁昌と云つたら此暑いのに怯けねえで、大層な參詣で御座いますせ、どうか彼のお娘子さんが何處かへお出なさる時は私ア始終お供をしたい者で』宗『なぜ』勇『どうも旦那すれ違ふ者が、皆な後を振返つて見ない者はごあせんせ、何も雲霞のやうな參詣人が皆七面様だ〳〵つて、一人でも譽めない者はごあせん、ソレに内儀さんの事を母親にしちッア少し年が若いし、姉にしちア年が上過ぎる、新造は柳腰の細そり姿で抱付きたいやうな娘だが、夫に引替て彼の年増はズングリで出つ尻で』宗『コレなんだ俺の前で』勇『ヘエ御免なさい』其晩お安が臺所を片付けて、二階へ來ると

糸『お安や今日はお祖師様へお禮參りをして來たので、安心して肩の懲が取れたやうな心持

だよ、堀の内は賑かだネ』安『私も毎月參りますが、今日はあなた何方から入らつしやいました』糸『四谷の通を眞直に新宿を通つて……』安『ア、新宿の方へ……彼の新宿には、あなた遊女が居るので御座りますよ、晝間は時々チラリ〳〵見掛けますけれども、宿場では彼處が一番繁昌ださうで御座います』糸『お客樣が澤山あるのかネ』安『あの紀州樣や尾張の御家來、其外お旗本から宜い御家人が遊びに行きますさうで、宿場女郎にしちやア、大變に見識のあるさうで御座いますよ……』糸『さうかえ』安『時にお孃さん私が些とあなたに、お話して見たいと思つて居ることがあるんですが、あなたお怒りなすつちやア可けませんよ』糸『何だい云つて御覽な』安『去年から斯うやつて長い間この高砂屋さんに、あなたと私が御厄介になつて居る許りでは御座いません、あなたが御病氣の時は、ア、やつて能くお世話をして下すつた上に、お醫者樣の藥禮もして下さるし、又此間はお孃さんと私へ着物まで買つて下すつて、ホンに氣の毒で堪りませんから、私は下婢代りに臺所を働いて居ますが、あなたが先達てお病ひなすつた御病氣は、物事を心配して出た氣鬱の病だと申すことです、お若いから宜いが年老つて居れば勞症と云ふ病、お醫者樣もあなたは心配性だから、氣晴しをお勸め申さなければ可けないと、斯う仰しやいました、どうで御座いませう、あなた彼の新宿へ藝者にお出になりませんか、あなたには藝も立派にお出來なさるし、彼處らの藝者には勿體ない位、人中

に出るのは耻かしい、厭だと云ふお氣があつては仕方がありませんが、三味線を彈き歌を唄つて、氣晴し旁々御家人の客も澤山來ませうから、鈴木主水さんは只今何處に何うしてお在なさるか、主水さんは旅へお出でがなければ、其母親さんと云ふのは何處に往つて居らつしやるか、ヒョッと知れないものでもあるまいと思ひます、又是れは大層遠いお話ですが、先生を殺害して十六羅漢の彫刻ある香箱と、藤四郎吉光の脇差を盜んで姿を隱した賊が、若しや新宿あたりへ立廻つて、ヒョッと其二品が眼に掛るまいものでもなからうと存じます、あなたが藝者になれば身の代と云ふ金が幾らか取れませう、其のお金を此處の高砂屋へ入れたら、宿料の幾分かにもならうと思ひます、厭だとお怒りでは困りますけれ共、念の爲め一つ伺つて見るので御座います』お糸は話の始終を聞いて暫時考へて居りましたが『お安や成程それは親の讐を尋ねる途にもならう、併し私はお前の知つての通り、主水さんとの約束のある體、さう云ふ賤しい業をして、萬一鈴木さんに知れた時は卑しい者と疎まれやしまいか』安『其樣な事はありますまい、鈴木さんにお目に懸つた其時には、斯う〳〵云々と今日の場合をお話し申しだら、道理と思召すで御座いませうし、又其處に親の讐を探すと云ふ一ケ條の言譯もあります、何もあなた娼妓になるではなし、藝者は客に藝を賣るだけで、肌身を賣るのぢやア御座いませんから、構ひは致しますまい』糸『夫ぢ

やア お前の云ふ通り氣晴らしにもなるし、又尋ねる鈴木さんに會ふ手段になるかも知れないから、妾は藝者に身を賣りませう、明日此家の主人に相談して見てお呉れ』安『さう云ふお心持なら、一つ聞いて見ることに致しませう』翌日になつてお安が高砂屋宗左衛門に、お糸の身賣りの相談を致しまするとと 宗『そんな御心配はなさらないやうに、何うせ私の處は金のない身上、隨分時に依ると困ることもあるけれど、併しどうか斯うか繰廻しの付く私、だから決して其樣なことをお氣遣ひになつて、お娘子を藝者に賣るなんてエことはお止しなさい、ソレにお前さんは下婢代りに働いて下さるし、お糸さんは裁縫を手傳つて下さるし、何のことはない、お針に下女を給金なしで置くやうなものだから、必ずお心置なく鈴木さんの居所の分るまで、何時までも私の家に御逗留をなさいませ』お安は主人の親切に有難涙に暮れながら 安『有難う御座います、併し又ア、云ふ人の出入の多い所に居ましたら、鈴木さんの居所が、ヒョンナ事で分るかも知れません、一つにはあゝ云ふ場所に往つて居りましたら、氣も紛れ體の爲めにも宜からうかと云ふ當人の望み、何うか一つ御面倒でもお世話をなすつては下さいませんか』宗『ウム成程さう云ふ譯なら、一つ相談して見ませう……エート新宿の藝者といふと是は何だて、藝者は内藝者の方が宜からう、大見世の女郎屋などゝ云ふのは、下等の商賣だから定めし家の中も亂れて居るだらうとお思ひでせうが、隨分確な女郎屋もあり

ますよ、橋本屋と云ふのは新宿で一番大きい家だが、此家ならば家中の取締りも能く調つて居るし、幸ひ家が懇意でもあるから、早速一つ橋本屋に會つて話しをして見ませう』と宗左衛門が直ぐと橋本屋の内所へ尋ねて來まして 宗『さて私共へ泊つて居る身分のある娘子だが少し尋ねる人があつて、其人が此近邊に居ると云ふ當りは付いて居るが、どうも未だに運り會はない、どうか此方の藝者になつて、御家人の客を尋ねたら知れやうかと云ふ、どうだらう此方で内藝者に置いて呉れまいか、お前も知つての通り私は物を飾つて云ふことの出來ない男、女衒ぢやあなし、判人ぢやあなし、利かんで宜い口は利かないのだから其の積りで買つて下さらねえか』橋本屋清兵衛が 清『夫ぢやあ、もう一人位の内藝者を置いても宜いが、顔はどうだね』宗『顔はすばらしい美人だ、恐らく此の宿に並ぶ者はありますまい』清『ウームそれで藝は……』宗『藝は何でも出來ないものはない、些と要らない藝が出來過ぎて困る位』

清『要らない藝と云ふのは……』宗『先づ三味線や長唄で夫から琴に盆畫、新宿の藝者なんぞには要らない藝だが、盆の上に砂で畫を描く……』清『ウームそいつは珍らしい藝だが、客の所望でもあれば格別、平生には些と不用な藝だな』宗『夫で池の坊の生花も出來るし、お茶は眞の臺子の許しを得、筆もなか〳〵達者で、人品は極く高尚で柔和な性質なんで、何一つ申分のない娘』清『それは實に掘出し者だ、私共も新宿の橋本屋と人に知られた女郎屋で、客種が

好いから女郎にも挿花や茶の湯位は習はせて置いても宜い、又外に習ひたいといふ者があれば教へさせても宜い、三味線も地が長唄なら、端唄も少しやつたら直ぐ出來るだらう、ぢやあ何うか今夜其婦人を伴れて來て、一應見せては呉れまいか』宗『ぢやあ今晩連れて來てお目に掛けませう』と宗左衛門が立歸つて、お糸お安に其の話をして仕度と云ふても別段良い衣服があるでなし、先達て拵へた單物を著せ、相當の化粧をさせて伴れて來て見ると 清『何うも素晴しい別嬪、願くば此子が娼妓になつて呉れゝば大變な金蔓だが、さう云ふ譯には往くまい、兎も角抱へると爲やう、金は幾ら位要るのかね』宗『金はモウ多分には要らないので、唯尋ねる人に廻り會ふまでだから、怎うか年期を短くして貰ひたい』清『夫も宜いけれど年期を短くといふた所で、抱へる直ぐ明日から座敷に出せるものではないから、半年や一年では困る、二年としてはどうだらう』宗『二年……宜いとも〳〵拜借金も、何うか成だけ輕い事にして置いて戴きませう』清『ぢやあ一年十五兩詰といふことにして二年で手取三十兩、總ての入用は此方で持つといふことにしませう』宗『成程其位あつたら宜いでせう』清『そこで高砂屋さん、此娘をお前さんの娘と云ふことにして置いて呉れないか、人別が面倒だから……』

宗『ウムそれぢやあ何に、私の娘分にしても一向差支へない』萬事相談が整ひました、素晴しい美人殊に藝も勝れて居るのに、一年十五兩といふのは隨分安い、併し特別の話、最も當

時の金とは違つて其時分の三十兩と云ふ金は大層なもの、高砂屋は萬端取極めて歸つて來てお安に右の話を致し三十兩の金を渡しました、お糸が橋本屋へ住込むに就ては、種々當座の買物もありますから、其内五兩取つてお安に五兩殘りの二十兩を宗左衛門の前へ出して 宗『今までの宿料、是れだけでは迚も足りますまいが、何うか此金を取つて戴きたいといふ』と高砂屋が其金を押返して 宗『イヤもう宿料なんて其樣な心配には及ばない、何の勤めをするにも、金があれば調法だから其方へお置きなさい、お糸さんが身賣をした、其金を私が宿料に貰つたといつては私の氣が濟まぬ』安『でも此のお金はお嬢さんも私も不用で御座いますから何うかお取りなすつて下さいまし』宗『そんなら此金は私が預つて置かう、何時でもお前さんの方で、お入用の時には此の二十兩の金は私が出すことに致しませう』と預かりました。

（第三十席） 隼太赤坂紀伊國坂へ道場を開く事、並に主水お安に邂逅の事

夫からお糸の身の廻りの仕度をして、再び高砂屋がお安同道で、お糸を橋本屋へ伴れて參りまして、萬事お糸の身の上を賴んで歸りました、橋本屋でも座敷着の仕度もありますから、お糸の見世出しは九月の末といふ見込み、清兵衛の女房も非常にお糸が氣に入つて居ります

清『お糸や、お前突出しまで、唯ブラリとして居るも退屈だろうから、此内には娼妓が三十人も居る、其の中でお前の知つて居る藝を習ひたいと云ふ者があつたら、氣任せにボツ〳〵教へてやつて呉れまいか』

糸『それはモウ何なりと自分に出來ますことだけは教へませう』橋本屋は新宿隨一の大店で、娼妓の三十人も居りますが、盆畫を習ひたいと云ふ者は一人も御座いませぬ、中に一人琴を習ひたいといふ者がありました、此者は由緒ある人の娘ですが、親の不幸で此家に賣られた者で、容貌もよし柔和な女で、當時お職を張り通して居ります全盛の娼妓、主人の清兵衛も家の金庫か娘のやうに大事にして居る女ですから 清『それなら早速教へて貰ふが好

い』といつて琴を買つて遣りました、又三味線を習ひたいといふ者が十人ばかり、挿花が五六人、中には茶の湯を教へて貰ひたいといふ者も御座います、お糸が段々當人々々の好みの者を教へます、其上に行儀作法は申すに及ばず客に送る文の書きかたまで教へますので、お糸が橋本家へ來てから、橋本屋の娼妓の風儀がガラリと變つて仕舞ひました、清兵衛の喜び云はん方なく 清『時にお糸や今年は店へ出ないで、娼妓にいろ〳〵藝を教へてやつてお呉れ來年の春正月から出て貰ふ事にしやう』橋本屋夫婦はお糸の器量は好し、藝は出來ますので、今では我娘のやうに可愛くなりまして、成るべくお客の前へは遲く出すやうにと思つて居ります、其中に其年も暮れてはや元祿の三年春正月になりました、金を出して抱へた女さう何時までも只遊ばして置く譯には往きませんから、愈々見世へ出しますとサア評判が立つた 甲『橋本屋へ今度大層な藝者が出た、何でも出來ないものはない、唯歌俳諧が少し何うだらうかといふ噂だが、盆畫とか云つて盆の上へ砂で畫を描く藝も出來るさうだ、其上に大層な美人、新宿遊びをする者がお糸を知らなくつては耻だ』といふとり〳〵の噂、中にはお糸を白糸々々と綽名をする者もありますので、橋本屋の此節の繁昌は眼を廻す位、娼妓よりはお糸を目懸けて來る客が多いのでございますが、其が爲めに娼妓もドン〳〵賣れます、お話し別れて師匠の尾崎有善を殺害しました島本隼太の身の上に移ります、サア尾張の犬山で

島本隼太が尾崎先生を殺害致し、四百兩餘の大金を奪ひ取り、其上尾崎家祕藏の二品を盗み取つて何知らぬ振りをして居りましたが、身分は高の知れた二十五石の侍ですから、此先き莫大の金子を使つて、放蕩をすれば忽ち現はれるは必定、況して十六羅漢の香箱、藤四郎吉光の脇差は紛失屆けが出て居りますから、他人に見せることが出來ませぬ、けれども金と云ふものはあると兎角使ひたいもの、流石の隼太も我慢し切れず、是はどうも此の犬山を立退く外はない、拙者程の腕前があれば何處の大名に仕へても二十五石といふことはない、五十石や七十石には有附けるだらう、併し此處を立退くには、始末宜く立退かんと露顯の基と考へて、伯父の島本清兵衛の所へ來て　隼『さて伯父さん少々御相談があります』清『何だ』

隼『外ではございませんが、尾崎先生の討れてお果なさる際は、私も先生日頃の扱ひに對し不快に思つて居りましたが、考へて見れば大恩のある手ほどきの師匠、何うも私が棄て置くといふは義でない、お糸殿はお安を連れて何か心あり氣に犬山を立ちなすつたが、どうも婦人の腕前で、先生を殺害する程の盗賊は討てまいと思ひますから、手前が仇討に出立をして、八百萬の神々へ祈誓を掛けて、師匠を殺した賊を討果して無念を霽らして上げたい、どうか讐討の願書を上げたいが、一名では可かぬ事故、伯父上連判を捺して下さらんか』清『ウムそれは道理千萬だが、併しそんならお糸殿が敵討ち出立の時になぜ同道をしない、後見に

なつて助太刀をしたら立派なもんだらう』隼『イヤそこです、彼の婦人は絶世の美人、其者と一所に仇討出立を願ひますと、何か拙者がお糸殿に執心でもあるかのやうに思はれるのが如何にも殘念、それ故彼の折は止まつたのでござる、拙者は一人で讐討に出立致さうと思ひます』清『成程それもさうだ、立派な考へ感心な事だ、それぢやア連判をしやう』元來隼太といふ奴は腹の黑い人間で、深い謀計のあることゝは夢にも知らず、そこで兩名にて、尾崎先生の無念を霽したうござるから、御暇を願ふといふ願書を差出しましたから目付から家老、家老から成瀨遠江守へ申立てますると　遠『如何にも師弟の禮義、斯うありたいもの、感服の至りである、願ひの通り讐討出立差許す、彼は少身ゆゑ路用の手當をして遣はせ』といつて上から金五十兩渡されたとは何事で御座いませう、多くの若侍達は　○『成程どうも持つべきものは弟子なり、島本さんは感心な人物、我々の爲めにも師匠、斯うやつて安閑と御奉公をして、島本さんに許り先生の無念を晴らして貰うては濟まぬ』とて五十兩拵へて隼太へ餞けしました、斯うなつて見ると家老、用人、番頭、物頭總て重役も打捨つて置かれないから、一同で五十兩といふ金子を纏めて、路用の助けといつて呉れる、盗棒に追錢とは此の事で隼太が計略行はれて茲に百五十兩、思ひも寄らぬ金子が手に入つて、是から島本が武術修業を名として、懷中には大金があるから榮耀榮華、名所古跡を見物に及んで、何うしても出

世をするには大名の集つて居る所の江戸表に出なければ成らぬ、さうして傳手を求めて何れへかの大名に、島本隼太で住込むとも、或は姓名を替へて住込むとも、其處は其時の臨機應變、萬一蓄への金子を悉皆使ひ果して、宜い主取りの口がなかつたら、香箱か吉光か何れか一品殘して置けば宜いから、片方を賣拂つて路銀にしやう、それでも有付かない時は折を計つて此犬山へ歸る途中、間道で弱さうな奴を叩つ斬つて、その首を提げて此奴が粟田口吉光の脇差を持つて居りましたゆゑ、必定尾崎先生を殺した曲者に違ひないと認め、討取つて持參致しました、香箱は此奴が賣拂つたと見えて所持して居なかつたと斯う申立てたら、師匠の仇討を仕遂げたとは殊勝なりとて、再び此犬山へ歸參が叶うであらう、其時は以前の二十五石では殿樣も置かつしやるまい、何れにしても行先きは困らない』とは隨分勝手な考へでございます、是が斯う隼太の考へ通り世の中が渉れるものなら、何も心配する所はございませぬ、惡事を働いても平氣な顏で居られる、霜月の上旬島本隼太はいよ〳〵犬山を出立に及び、三竹の宿にて見送りの若侍と送別の酒宴を催して袂を別ちました、是から隼太はブラブラ歩き始めましたが、劍術の道場を見ましても、立寄つて試合をしやうと云ふ心持は更にございません、只名所古跡を見物して、氣の進まぬ時には四里か五里歩いて旅籠に著き、もし草臥たと思へば駕籠や馬に乘りますから、大名の道中よりか氣樂で御座います、色町が

あれば其處へ揚つて遊興をするといふ有樣ですから存外金は費ります、道中別にお話もなく無事に江戸に乘込み、馬喰町へ旅籠を取つて、江戸見物旁々何場へか道場を構へやうといふけれども劍術の道場ばかりは、下町の繁華な處へ出した所が繁昌するものではございませぬ、隼太もそれと心付きましたから、大名や御家人の多い武者小路か山の手に道場を出さうといふ考へで、馬喰町の旅籠屋を引拂ひ赤坂へ來て更に旅籠を取つて、彼の近傍の地理を見ますると、丁度紀州のお屋敷のあります紀伊國坂下に、宜い明地がございますから其近傍へ來て　隼『少々物をお尋ねします、此地面の差配をして居る者は何方で……』○『それは此の表通りの德兵衛と云ふ小間物屋が差配をして居ります、地主は何でも青山邊の御家人樣が持つて居なさるそうで……』隼『是は有難うございます』と其德兵衛といふ小間物屋へ來て　隼『拙者は犬山の浪人、當地へ劍術の道場を一つ構へたいと思ふが、彼處にある空地を借受けることは出來んかな』德『エ、宜うございます、併し御法で御座いますから證人をお立て下さいまし』隼『證人そりやあ困つたな、乃公は始めて江戸へ來たもので、知己と云つたら一人もない何れ旅籠屋へ歸つて話をしやう、形ばかりの證人で宜いのだろう』德『ハイ形ばかりで宜しいのでございます』そこで泊つて居る旅籠屋へ歸つて主人に金をやつて賴むと　主『エ、宜しうございます、手前で間に合ひまするなら、貴所の身元引受を致しませう』頓て地代も幾らと

極つて、萬事旅籠屋の主人の世話で大工を賴み、劍術の道場の普請を始めました、木材も安いし大工の手間も安し、日ならず立派な道場が出來上りました、山師でありますから道具屋から茶簞笥、用簞笥、鎧櫃抔を買込みまして、鎧櫃には島本隼太といふ道中を擔いで歩いたやうに、名札を打つて恭々しく床の間に飾り附け、幅物、花瓶一切の室内の裝飾品から臺所道具に至るまで取揃へ、口入屋から老爺を一人抱へまして、義世流指南島本隼太といふ立派な表札を掲げました、此の表札が出ると、紀州の御屋敷下へ妙な町道場が出來たと云つて、血氣に逸る若侍達が往つて、一つ打込んでやらうではないかと試合に來ると、島本隼太も流石に尾崎先生仕込みの腕前、素見半分に飛込んで來た野次馬に、負けるやうな事は御座いませぬ、何れも這々の體で逃げ歸つて仕舞ひます、何うも年は若いが豪い腕前だと云ふ評判が高くなりまして、紀州の御家中が弟子入をするやら那の近傍の御家人、旗本の二男三男が追々聞傳へて門人になると云ふ有樣、抑も此義世流の家元は神田お玉ヶ池の秋月刑部先生でありますが、此先生は既に病死し御子息の右衞門と云ふ人は、四國の大名に抱へられて江戸に居りませぬ、只秋月刑部の舍弟に秋月重助と云ふ者がありましたが、此人は義世流を嫌つて宮本老人の神免二刀流を慕ひ、姓さへ神免と改めて大阪に移り、當時堂島で老て益々盛んに道場は繁昌して居ります、さういふ譯で當時義世流の家元の秋月といふものは、江戸に絶え

て仕舞つたのでございます、麹町に鈴木傳内兵衞といふ義世流の達人がありましたが前申上げた通り此先生は筑波三平に討たれて、今は亡き人の數に入り、其子息の主水も仇討の旅路に上つて、江戸に居るか居ないか分らぬ、唯三番町に秋月の四天王と呼ばれたる、小笠原重左衞門と云ふ御旗本で義世流の指南として大層行はれて居りますが、旗本ですから門人は皆身分のある人ばかりで、小身者は居りませぬ、所へ今度島本隼太が義世流の町道場を出しまして、勝手に修業が出來ると云ふ所から、大層道場が繁昌するやうになりました、お話變つて鈴木主水は津山で仇討手違ひに相成りまして、大阪長堀南詰の轡屋に姑く隱れて居りまして、敵の行方を詮議致しますると、何うも父の讐を討つには江戸に居た方が勝手が宜ささうでもあり、長尾治太夫は遠からず大阪の藏屋敷詰でなく、江戸詰になりさうで、さすれば氣に入りの筑波三平、必定お供をして江戸へ參り主人の威光を笠にきて、怯めず臆せず江戸市中を徘徊するであらう、久々で母上にも會ひたし、江戸に往つて長尾治太夫の安否を待つ方が、便利らしく思はれますので、尾州の犬山へは書面を出して置きまして、佐平治を連れて道中恙なく江戸表へ引返しました、首尾克く讐敵を討つて歸るなら、直ぐに母に對面も出來ますが、まだ心願成就しないのですから、いきなり我家へ乘込む譯には參りませぬ、夫ゆゑ先づ三番町の小笠原重左衞門の所へやつて來まして　圭　鈴木主水立歸りました、先生に御目

通りを願ひたい』重左衛門久々の對面『イヤ主水案じて居つたが、樣子は如何であつたか と云ふ、主水が今日まで苦心の段々に一伍一什を物語つて『父の讐を討ちますには江戸に居る方が、勝手が宜いやうに思はれます故、一旦立ち歸へつて參りました、腑甲斐なき段は何うか先生より、母に御詫をして戴きたい』『イヤそれは案ずるに及ばぬ、如何に急いでも時節が來なければ討てるものではない、不幸の重なる時は是非のないもので、其方の留守中に屋敷が燒けて仕舞つた、併し母と召使の二人ぐらし、燒跡に普請をするも無益と思つて、幸ひ小日向武島町に、さゝやかな御家人の立退跡があつたから、それを買つて今では其處に往つて居るが、母親も誠に丈夫でな、其方の顏を見たら定めし喜ぶだらう、乃公が一緒に同道しやうと、重左衛門が主水佐平治の兩人を連れて、小日向武島町へ尋ねて參りました、親子久々の對面、主水は涙ながら今日までの始終を物語りますと、老母も涙に暮れまして母『御身が津山の災難、秋月の若先生のお蔭で助かつたといふのは誠に目出度いこと、何うか私の存命中に親父さんの無念を晴して貰ひたい、仇討の見込のない旅路に苦勞して居た所が詮ないことゆゑ、サウいふ譯なら江戸で樣子を窺ふが宜い』と母親も喜んで居ります樣子、重左衛門先生も出來るだけ助勢をしてやらうといつて、自分の用人の伜で當時遊んで居る者がありますから、此者を賴んで森大内記殿の足輕に住込ませて、國許に居る長尾治太夫が江戸に

出府の際は、必ず筑波三平といふ用人がお供をして來るであらう、若し來たら直ぐと注進するやうにといひ含めて、森の屋敷へ聞者に入れて置きました、此方は主水、何うも犬山のことが案じられますから、又手紙を出しましたが一度も返事が來ませぬ、佐平治も不審に思ひまして、何うも犬山から御返事がなければならぬ筈ですが、何の便りもないと云ふのは變ですな、是れは一つ私が、河田ヶ窪の成瀨樣の御屋敷に往つて、夫となく聞いて見ませう』

『どうかさうして呉れ』『畏まりました』と佐平治が成瀨の屋敷へ來て尾崎先生の樣子を聞くと這は扨も如何に、尾崎一家の大椿事、有善先生は盜賊に殺されて金子は勿論、祕藏の吉光の脇差と、名古屋の大守から拜領の香箱も奪ひ取られた其の上に、殺されやうが武藝者に不似合の死樣だと云ふて家名斷絶、お娘子は之を心外に思ひ、仇討に出立するといつて犬山を立退いたといふ、驚いて佐平治は立歸つて來て斯くと主水に話しまするとと、主水も吃驚して『親母さん犬山の尾崎先生は、賊に殺されてお家は爾々お娘子も行方知れずに成りましたさうで』母『ソレは何うもハヤお氣の毒千萬、其方の爲には尾崎先生は師匠なり又親も同樣其眷族はお娘子で男子でございませぬ故、迚も無念を霽す力はありますまい、お前は大事を控へて居る身體なれども、師匠の御恩も仇にはならぬ、何うか尾崎さんのお娘子の行方を搜し當てゝ、御無念の霽れるやう力を添へて上げるが宜い』『私も其覺悟でございます』と早

速主水が三番町の小笠原の屋敷へ參りまして、重左衛門先生に犬山の椿事を物語りまするとと重『ヤアそれは〳〵、其お糸といふ娘子は外に便る人でもあるか知らん』主『何うも江戸表に知邊がないやうで御座います』重『そんなら尙更の事、犬山を立退いたとしても、江戸に來たらお前を尋ねるだらうから、お前も心に懸けて探し當てるが宜い、乃公も氣に懸けてやらう』といはれましたが、何うも主水が又候お糸の行方を探す爲めに、江戸表を出立するといふ譯にも往かず、此方も大望のある身の上、今にも長尾治太夫と一所に、三平が江戸に出て來るかも知れませぬから、殘念ながらお糸の穿鑿も心に叶ひませぬ、丁度其年の十月、平賀佐平治が靑山に少し用事があつての歸途、紀伊國坂の處へ懸つて參りまするとと、一軒の道場がありまして、チヤン〳〵といふ竹刀の音、佐平治も其道の者ですからハテなと立止ると、ヤツ〳〵と劍術の稽古をして居ります樣子、何流か知らんと不圖見ると、義世流劍道指南島本隼太と、筆太の看板が揭げてありますので　佐『ハテ奇體なこともあるものぢや、此島本隼太といふ奴は犬山の尾崎先生の一番弟子、乃公の主人とは兎角氣が合はず、技倆も及ばぬ所から卑怯にも主水を暗殺しやうと企てゝ、或夜主水の寢間へ忍び込んだのを、此方が悟つて乃公共が懲しめの爲に袋叩きにしてやつた奴、同姓同名同流と云ふ者は滅多にならう、若しや彼奴ではないか知らん』と、武者窓から覗いて見ると指南をして居るのは、正しく犬山

に居た島本隼太に相違御座いませぬ、佐平治は吃驚して　佐『ハテな島本隼太め、何うして此の江戸へ出て來たのだらう、兎も角此の構へは立派な道場だ、當今の所では門弟も澤山ある樣子』とすつかり中の樣子を見て、それから自身番の所へ來まして　佐『少々お聞き申したう御座る』○『ヘエ何で御座います』佐『此の御町内、是から半町ばかり先の右側に義世流と云ふ看板を掛けた、劍術の道場がありますな』○『ヘエ左樣で』佐『那れは何月頃道場が出來ましたのでございます』○『ヘエ此春道場開きをしました、御普請は去年末詰つてから初めて、一月の末に出來上つたのですが、何しろ當今ぢやあ大層評判が宜う御座んして、弟子も此節は次第に殖えるやうです』佐『有難う御座る』と佐平治は歸つて來て一間に主水を呼んで　佐『旦那今日私は不思議な奴を見付けました、尾崎先生の處に居た島本隼太が、紀伊國坂へ道場を出して居ります、今年の二月から道場を開いたのださうで、奇體な事があるぢやあございませんか』主『ヤツそれは〳〵時に佐平治尾崎先生が賊に殺されたのは何月か』佐『ハイ今日成瀨の御通用門で聞いて來ましたのが、去年の秋九月だそうで』主『ウム隼太は道場を開いたのは當年の二月だな、シテ見ると先生が討たれた後に犬山を島本が浪人したやうに思はれる』佐『どうもさうらしうございます』主『ウム、ハテナ』と主水は首を捻つて、若しや尾崎先生を殺したのは隼太ではないか、併し彼が殺したなら遠く離れた江戸にもせよ、島本隼太といふ名前で

道場を出しはすまい、兎に角何で犬山を浪人したか、其次第を聞合して見やうと思ひましたが、種々の用事に紛れて其儘捨置きました、光陰矢の如く其年も暮れて、翌年の二月十三日、主水は佐平治を供に伴れて堀の内の祖師へ參詣しやうと思ひまして信樂と云ふ料理屋の手前まで參りますと、背後から 安『佐平治さん佐平治さん』といふ女の聲、ハテなと回顧いた佐平治 佐『オヤ是はお安さんぢやないか』といはれて嬉し涙に掻暮れ 安『佐平治さんホンにお懐しう御座います、那のお先にお出でなさるのは鈴木さんでは御座いませんか』佐『如何にも旦那だ、旦那旦那』主『何だ』佐『一寸此方へ犬山のお

安さんが』主『ナニお安が……ヤツ是はお安か妙な處で……何しろ途中では話も出來ぬ、兎に角此處へ這入らう』と三人連立つて信樂といふ料理屋へ這入りまして 佐『何うか靜な處を借りたい』女『サアどうぞ此方へおいで下さいまし』宜い客だと思ひますから、茶屋の女中が他人の居ない離れ座敷へ、三人を案内して茶抔を侑めて居ります 主『何うも人と云ふものは何處で運り合ふか知れん者だな、一杯飲みながら緩くり話を聞かなければならぬ』と酒肴を命じて、差しつ押へつ主水は小聲にて 主『偖てお安三年目の對面、乃公は此江戸へ來てからも犬山へ書面を出したが、一向返事がない、餘り不思議に思つて此佐平治を河田ケ窪の成瀬の御屋敷へ聞きにやつた所が、案外にも先生は去年の秋賊の手に掛つて非業の御最期、それのみならぬお家取潰しの後、お糸殿は涙ながらお前と共に犬山を立退いて、何處に何うして御座るか分らぬと聞いて、私は非常に案じて居つた、一體マア何う云ふ譯か』と問はれて、お安は涙ながらに在りし事ども物語り尚ほ 安『お孃さんと私と一緒に貴所に廻り會ふのを樂しみに、江戸を指して參る途中、中仙道の輕井澤米屋六兵衛方にて、國元から連れて來ました兩人の男共の出來心から、路用着類は申すに及ばず頭の物まで殘らず盗られて仕舞ひました』主『それは〳〵重ね〳〵の御災難、嘸ぞお困りなされたらう』安『どの位難儀したか知れませぬ』と夫れから米屋六兵衛並に四谷傳馬町の高砂屋の親切、お糸が内藝者に身を賣りし一

伍一什の話を致しまするとと、流石の主水も吃驚して『エッそれぢやあ那の名高い橋本屋の白絲といふのはお糸殿か』安『左樣でございます、不思議にも今日堀の内へ參る途中、貴所に御目に懸つたといふのも、お祖師樣の御利益で御座いませう、此事をお孃さんにお話し申したら、どんなにお喜びでございませう』主『何と佐平治我等の身の上は如何なればこそ、斯くも不運の續くことか、鈴木といひ尾崎といひ、何たる不幸の家だ、併し今日の苦しみは他日榮える基になるかも知れぬ、今更嘆いても返らぬ事なれど、實に不運の譯だのう』佐『旦那樣……お安さん、御心の中をお察し申し上げます』主『イヤ話が濕つては酒が旨くない、是からの仕合せを祈るの外はない、時にお安、先生がお逝れの時又お糸殿が御出立の時分には、一番弟子の島本隼太は居たらうな』安『居りましたとも、先生がお逝れ前には先生の御意に入らぬことがあつて、道場へ足が遠う御座いましたが、夫でも先生がお逝れと聞くや飛んで來て御死骸に取縋つて男泣に泣倒れました、ア、師弟の間は斯ういふものかと、私まで貰ひ泣を致しました位、又お糸さんが犬山をお立ちなさる折に、島本さんがお入來なすつて、何處まで私がお力を添へますから此犬山に足を留めた方が宜からうと、お止めなさいましたけれども、お孃さんは何うしても貴所がお便り、是非お尋ね申さなければならぬと決心しまして達て止めるのを振り切つて、私と先刻お話し申した不屈の下郎と四人で、犬山を立退きました』主『フーム』と暫く小首を傾けて思案して居りましたが、主水は尙ほ隼太に疑ひを掛けて居ります樣子 主『お安其隼太は江戸に居るぞ』安『へイ彼の隼太さんが江戸に居りますか、何でまア江戸へ出て參りましたらう』主『それは私に少しく考へ付いたことがある』安『何しろ貴所お歸りには是非、お孃さんに會つて上げて下さいませんか』主『如何にも今日お糸殿に對面しやうから、お前も橋本へ立寄るが宜い、併しお前は女の事で乃公等と一緒に往くのも迷惑であらうから、私と佐平治は一足先に往つて橋本屋で待つて居る、お前は後から緩くり來るが宜い』安『有難う御座います、そんなら左う云ふことに願ひませう』と信樂の勘定を拂つて立ち出で是から主水佐平治の兩人お祖師參詣の歸途に、橋本屋でお糸に面會を致すと云の一條。

（第三十一席）主水お糸に再會の事、並に主水濱名和三郎を隼太方へ間者に入れる事

頃は燈火のつく夕まぐれ、橋本屋へ立派な若い侍が供を伴れて這入つて來ましたので、若い者は轉がるやうに其處へ飛出して 若『入つしやいまし、何うか御大小は下へお預けを願ひます』店先で話をする譯にも往きませんから、いふが儘に大小を預けて若い者の案内に連れて、引き付の座敷へ通りました、身分のある御旗本が忍びて堀の内の歸途に、チョンビリ遊

んで往かうといふので、茶屋へ掛らずに來たのだなと斯う思ひまして　若『エヽどういふこと に致しませう、お若い所に致しませうか、年増衆に致しませうか、これから白絲を呼んで一 杯飲まうと云ふのですが、誠に拍子が好かつたか直ぐと白絲が參りました　若『サア白絲さ ん、此座敷でげす』廊下に草履を脱いで此節はモウ座敷慣れて居りますから、白絲が障子を 開けて　糸『今晩は』　遣手が『オヤ白絲さん、先刻から旦那が御待兼、サア此方へ……』糸『御免 遊ばしまし』とスッと這入りながら何う云ふお客か知らんと、ヒョイと顔を上げて見まする と、ヤレ戀しや懐しや永の年月夢の間も心を去らず、尋ねて居りました鈴木主水でございま すから、吃驚仰天　糸『オヤ貴所は鈴木さん……』といつてお糸は前後を忘れてツカ〳〵と側 に寄添ひ、主水の膝に凭れて思はずワッとばかり泣伏しました、主水は共に涙に暮れ　主『オ オお糸さん』と背中を撫でさすつて居る體を見るより、イヤ、ヤリテの婆さん膽を潰したの なんの、お酌をして居ります小女も、廊下へ逃出すと云ふ始末、ヤリテが内所へ來て『旦那 旦那白絲さんがね、今のお客さんの顔を見るや否や、斯う〳〵云々大變ですよ、多分先の亭 主か何かでせう、今に白絲さんは自由廢業を爲さるでせうよ』此の時分自由廢業なんかあつ た譯ぢやあ御座いません、清兵衛は落着いて　清『ア、左うか、お安から豫て話を聞いて居た が其の御武家樣こそお糸が日頃尋ねて居る御家人だらう、よし〳〵騒ぐにア及ばん、其の座

敷へ暫時往かぬが宜い、お手が鳴つたら往くやうに』流石女郎屋の主人だけで、氣轉の利い たもんで粋を通して居ります、此方は　佐『お嬢さん誠にどうも久し振りでお目に掛りました 今日堀の内の信樂の前で、圖らずもお安殿に遇ひまして、斯う〳〵云々、始終の話しはお安 殿から殘らず聞きました、嘸ぞ貴女も御無念で御座いませう、今にお安殿も此處へ參りませ う』主『お糸殿其お歎きは御道理なれど、今更歎いても詮ない事、是から行末の御相談致しま せう』と末頼母しき主水の一言に、お糸は涙を拂つて主水の顔を見上げまするとと　主『お安か ら委細の話は聞きました、貴女の御心中お察し申します、悔む場合でございません、此先の 覺悟が肝要、マア久し振りで一盃酌みませう、此橋本屋へ御自分が藝者といふ思付は誠に宜 い考へ……まだお父上を殺した者の手懸りは御座らぬか』糸『はいどうも手懸りは御座りませ ぬ……御返盃を』主『然らば頂戴』と口數は聞きませぬが、叔やかに献しつ押さへつして居る 互の心中察しやられて不憫で御座います、處へお安が息を切つて駈付けました　若『アお安さ んが來ました』橋本屋清兵衛が　清『マアお安さん』安『旦那今此方へお武家が御兩人……』 清『ア、今二階に登つてお出でになるが、何かい那の旦那がお糸の尋ねる……』安『左樣で御 座います、鈴木さんで御座いますよ』清『ぢやアお前も何か話があるだらうから、二階へお上 りなさい』安『左樣ならば御免なさいまし』とお安も二階へ上りまして以上四人、主水は佐平

治に向つてさて　圭『是から先はどうしたものだらう、お糸さんを身受をして、乃公の邸へ置く方が都合好くはないか』佐『併し旦那、御迷惑でもお嬢さんは此處に居て貰つた方が宜しう御座いませう、諸人の立入る所ですから、尾崎先生を殺害した者を穿鑿するには、却つて此家にお出なすつた方が都合が好う御座いませう、時々貴所が此所に來てお打合せをなさるやうなことになさいまし……何うで御座います、お嬢さん貴女が嫌なれば仕方がないが』糸『イヤ誠に此所の主人は好いお方で、私を娘同様に扱つて呉れますし、此節では遊女に三味線や活花茶の湯などを教へて居りまして、此家に居ても我家に居るやうな心持ち、少しも辛い事はありませぬ』圭『成程そんなら此家に居なさるが宜い……時にお安お前は當時何處に居なさるか』安『ハイ私は高砂屋と云ふ郷宿に、下婢代りをして居ります、主人の宗左衛門といふ方も誠に義侠心のあるお方で、能く話の分る人でございますよ』圭『夫ぢやア佐平治斯うしやう是からお安と一緒に高砂屋へ往つて、主人に對面して段々聞けば、お糸殿高砂屋の娘分になつて此家へ來て居るのだそうだから、お糸殿の身代金を償つて、さうしてお糸殿は今までの恩報じに此家に居る、其代り何時たりとも迎ひの駕籠を寄越したら、假令夜中でも、返して呉れるよう、自由の身にして置かうではないか』佐『如何にもさうすればお糸殿は自由の身、厭な客の座敷なら出ないと云ふことも出來る譯、至極宜しうございませう』ソコで主水は折々

來て打合せをするといふことに話を極めて、是から若衆を呼んで樓中の祝儀、飲食の勘定をしてお糸に別れを告げて、橋本屋を立出でお安を先に立たして鈴木主從が、四谷の傳馬町へ來て宗左衛門に對面をして　圭『始めてお目に懸る、拙者は鈴木主水と申す者、其方が今までの親切委細はお安から聞き取りました、是は誠に少々だがお禮の印でござる』と云つて小判十枚　宗『イエどう致しまして、斯樣なお禮を戴く譯はございませぬ』圭『マア何しろ是は取て置いて呉れろ、それから白絲の身の上だが借りたゞけの金子は支拂ふ故、白絲の證文を取返して呉れんか、併し當人は是まで通り彼家で稼がして置く、其の代り何時でも用事があつて迎ひをやつた時は、すぐに返して呉れるやうに掛合つて貰ひたい、乃公も時々彼家に往つて面會する樣に相談をして參つたから……』宗『エ、畏まりましてございます、どうか是からは私に相當の御用が御座りますれば、何なりと此宗左衛門が貴所の御便利に成りますやう、御相談に預りませうからお云付け下さいますやう』圭『何分宜しく賴む』宗『及ばずながらお力添へ致します』白絲の身代金を宗左衛門に預けて、主水は佐平治を伴れて武島町に立還り、母親に今日圖らず尾崎の娘に邂逅つた、始終の話を致しまするとと　母『オ、さうか、是れといふのも日頃信ずる神々の御利益、力になつて上げて下さい私も一目逢ひたい』圭『御道理で御座いますが、お糸殿は計略の爲めに橋本家に其儘置くことに致しました、何れ折を見てお會ひ

なすつて下さい、面の美しいのみか心立ても誠に怜悧な優しい女子で御座います』母親も大きに安心致しまして其の夜は安らかに眠りました、此方は翌日高砂屋が橋本屋へ來て身代金を並べて　宗『何うかお糸殿の證文を返して貰ひたい、併し今俄に連れて往つたら店の繁昌にも障りませうから、當分此家に置くが、其代り大概お察しもあらうが何時でも用事のある時は、不都合のないやうに戻して貰ひたい』清『高砂屋さん私もソレと察して居た、夫ぢやア證文をお返し申さう、俺も娼妓は別だが内藝者で斯樣金儲けをした例はない、モウ二三年も辛抱して呉れゝば、橋本屋は新宿中の地面を買切つて仕舞ふかも知れぬ、如何な日でもお糸には、玉の二三本附かない日はないので、ドノ位儲けたか知れない、ソウいふ譯なら身代金はお糸に上げませう、此金は持つて歸つて下さい』宗『イヤそれはお前さんの御運の好いので、兎に角證文も入れてあることだから、どうぞ此の金を取つて置いて呉れ』といつて請取りませぬ、清兵衛も少し考へた事がありますから、夫なら兎も角預つて置きませう、其代り高砂屋さん何時でも御用のある時は、迎ひをお寄越しなさい』宗『どうか宜しく賴む』と高砂屋は證文を持て立歸りました、偖これが緣になつて主水は女郎屋の引け少し前になりますと、母親を寢かして置て橋本屋に來ては敵の樣子を尋ねますが、何うも手掛りが御座いませぬ、或時主水が白絲に逢つて種々物語りし折に　主『島本隼太は當時江戸に出て來て、麹町の紀伊國

坂下に町道場を開いて居ることは、此の間もお話した通りですが、何うも私は此の隼太が先生を殺した賊ぢやアないかと怪しまれてならぬ、何か隼太を疑ぐる廉は御座いませんか』

糸『私は島本さんとは以前から氣も合ひませんで、碌々口を利いたことも御座いませんが、是れといつて彼のお方を疑ぐる廉は御座いませんね、尤も親父さんが隼太を私の婿にして、始終は養子にしやうと仰しやつた時分には、島本さんは腕が上りさうでしたし、身持も宜う御座いましたが、何うした調子か其の後めつきり腕が鈍つて不器用になりましたので、親父さんも是れでは迚も養子にすることは出來ないと云つて、見限つた樣子で御座います、折柄彼の方の伯父さんに當る清兵衛と云ふお人が、改めて私の養子にして呉れろと仰しやいましたが、其時に親父さんがア、云ふ見留の付かぬ者は婿には出來ぬと云つて判然御斷りなさいました、遺恨に思ふならそんな事ですが、どうも夫れが遺恨になることがなからうと思ひます』主『兎も角私が一つ無駄だと思つて、隼太の所へ探偵を入れて見ませう』其日は夫れで武島町の邸へ歸つて參りまして主水が　主『さて此探偵には誰を入れやう、佐平治は當時遊んで居るが、是は隼太を袋叩きにした位で、互に顏を知り合つて居るから、佐平治を入れる譯には行かない、誰か人はないか』と色々考へて見ますると、茲に四谷の御假屋横町に公儀の御家人の伜で、濱名和三郎といふ者がありまして、誠に瓢輕な面白い男ですが、學問は少しも

出來ず劍術は傳内兵衛先生の門弟で、隨分仕込まれたのでございますが、棒の持方も知らない位、其代り遊藝は大層上手で三味線を彈く、笛も吹く踊も踊るといふ浮氣者、親父さんは五十俵三人扶持で進物取次上番といふ御家人、堅氣の勤めで濱名碌助と云ふ其伜でございます、けれども父親さんが斯樣放蕩者に家督を讓つた所が、迚も公儀の御用は勤まらぬ、ヒョッとすれば御家人株を賣飛ばすかも知れぬと氣遣ひまして、今でいふ廢嫡次男に家督を讓つて次男が父親さんの進物取次上番の見習に出て居ります、左れば和三郎は何れかへ養子に往く身分でございますが、斯う云ふ放蕩者は御家人中の札附で、誰も貰ひ手がございませぬ、毎月父御さんから幾らといふ小遣を貰つて居りますが、名に負ふ浮氣者ナカ〳〵父親さんの呉れる小使では足りませぬ、藝は身を助けるとでも申しませうか、宮芝居の樂屋に這入つて内職に三味線を彈いたり、鳴物を鳴らしたり小使錢を取る、傍ら友達の幇間をして取卷いちやア、女郎屋に行つて三味線を彈いたり、歌を唄つたり踊つたりするといふ怪しからん御家人の伜、斯ういふ浮氣な男はイザ一大事といふ時の相談には、決して役に立ちませんが、又使ひやうで面白い役に立つこともあります、主水は此者なら如才なく拔目なくやつて呉れるだらうと見込みを附けました、時々遊びに來ますが近頃は鼬の途切りサッパリ來ない、モウ來さうなものだと思つて居ります所へ、ブラリと遊びにやつて來て 和『今日は』主『イヤ、濱

名か實はお前の來るのを待兼て居た、折入つて賴みがあるが一つ勤めて呉れんか』和『私へお賴みといふのは何でげす、何か御催しでもあつて私にお供をして茶番でもやれといふんですか』主『イヤさう云ふ陽氣なことではない、兎も角も佐平治酒を燗けて呉れ、一杯飲みながら話をしやう』ソコで酒宴を始めて程よく醉が廻つて來た所で 主『賴みと云ふのは外でもないが……』和『へ、何でげす』主『お前も知つてゐるだらう、彼の目黒鳥居坂尾崎有善と云ふ劍術の先生で、尾州の犬山の成瀨樣に抱へられて彼地にいつて居たことは』和『エ、〳〵尾崎さんは存じて居ります』主『其尾崎先生が犬山で御災難に遇ひなすつた事は聞いたかネ』和『ヘエ何でげすか』主『尾崎先生は犬山で殺された』和『エッそれやどうもお氣の毒な譯で、何でげすか劍術の遺恨で彼の大先生のやうな譯に』主『イヤ左うぢやない、盜賊が這入つて斯う〳〵云々夫が爲に家名斷絶、なんと氣の毒な事ではないか、拙者も尾崎先生の處に暫く厄介になつて居たが、是れ丈けの腕前になつたといふのは全く尾崎先生のお蔭、何うか尾崎先生を殺した曲者を探し出して、讐討を爲なければ子弟の義理が濟まぬ、少し手懸りがあるのだが、お前一つ探偵になつて呉れまいか』和『成程さうして何でげすか、其尾崎先生にはお子樣が一人もないのですか』主『イヤお娘子が一人ある』和『お娘子、其お方はどうなすつておいでなさるのですか』主『それはお前道樂者だから知つて居るだらうが、新宿の橋本屋の白絲といふ内藝者が

先生のお娘子だ』和『ヘエー那の名高い白絲さん』主『コレ其樣な大きな聲をするな、母親が眠つて居るから』和『ヘエー白絲さんですか私はモウ幇間同樣、御旗本の御次男なんぞの取卷になつて、那の橋本屋へも度々往つて白絲さんとは三味線を彈合つたり、何かして能く知つて居りますが、ナカ〳〵多藝な人で盆畫なんかといふ、珍らしい事をなさいます、那の方が尾崎先生の御娘子さんでげすか』主『そこでナ拙者と彼のお糸とは尾崎先生から公然御許しは出ないけれども、實は此佐平治とお糸の乳母のお安といふ者の立合で、枕こそ替さんが後々に夫婦といふ約束をして、内祝言の杯も取り替しある』

和『ヘエーお安くないネどうも先生、貴所ばかりはお堅いと思つて居りましたが、那の美人をお手に入れるとは、ナカ〳〵のお腕前でどうも天晴れ見上げたものでげすな、然らば今夜此のお肴ぢやア何でげすな、鰻でもお奢り

なすつて』主『マアそれは奢りもしやうが、それに就て成瀬の御馬廻役をして居た尾崎の一番弟子で島本隼太といふ者がある』和『ヘエ成程』主『其の隼太を實は尾崎先生が一度養子にしやうと仰しやつたことがある』和『成程』主『所が其隼太は不品行なので尾崎先生が養子の話を取消しなすつた』和『それア馬鹿々々しいネ』主『ソコで其隼太が、當時江戸に出て來て麹町の紀伊國坂下に、義世流の道場を開いて居る、是はどうも拙者の疑心かも知れないが、尾崎先生には云はゞ戀の恨みがあるから、有善殿を殺したのは或は此島本隼太ぢやアないかと思ふ所が白絲は其樣なことは無からうといつてるが、どうも拙者の考へでは隼太の仕業としか思はれない』和『成程』主『どうだらうお前一つ、此の島本隼太の道場へ弟子入をして、間者の役を勤めて呉れんか』和『宜しうございます、私は性來不器用で劍術の上らんのは畢竟自分の未熟ゆゑと諦めて居りますが、大先生には隨分お世話になつたお恩報じに、間者の役を勤めませう、併し若旦那、何か證據とするやうな物はございませんか』主『ウム有るとも〳〵、尾崎先生を殺して金を奪つたばかりでない、先生祕藏の十六羅漢の香箱と、粟田口吉光の脇差を盜んで往つたといふ、其香箱と脇差があればモウ賊は其者に相違ないのだ、其寶物を持つて居るか居ないか、一つ探り出して呉れんか』和『所で其二品はどんなものでげす』主『吉光の脇差といふのは出鮫で、尾崎先生の定紋の柊が目拔へ金で入込んである、鞘は蠟色で是も矢

張り金で柊の定紋が入れてあるが、其の金が餘り光り過ぎるといふことで、尾崎先生が金へ煙を掛けて置かれた、緣頭は赤銅で粟田口藤四郎吉光といふ銘が刻込んである』和『ヘエ：』圭『それで今一品の香箱といふのは、尾崎先生が名古屋の太守から拜領した品、後藤德女の作で十六羅漢が蓋に毛彫になつて居る、其眞中に梵字が一字彫込んであるが、餘程六ヶ敷い梵字と見えて、何と云ふ字か未だに讀んだ者がない、此二品だが其隼太が持つて居るか居ないか、一つ探つて見て呉れ』和『ヘエ畏りました、ソコでどうでげせう、今夜此勢ひで佐平治さんも御一緒に、橋本屋へ繰込まうぢやごアせんか、實は私も橋本屋には馴染の女があります、又どんな表裏で他の客と往かないものでもない、何うが一つ白絲さんに此男を俺が間者に賴んで、島本の道場へ入れるのだから、以來別段心安く時々酒の一杯も振舞ふやうにと、水向けをして下さいませんか』圭『宜しい夫ぢやア今夜行かう』と三人連立つて橋本屋へ繰込み白絲を聘げて一騷ぎ騷いだ後、圭『お糸殿此者は私の父親の弟子、是れから島本の樣子を探つて貰ふのだから、此人が來ても別に要心するに及ばん、和三郎の話は誠の話と聞いて、お前も何か相談があつたら、腹藏なく打明けて話すが宜い』糸『有難うございます承知致しました』嚮て酒宴を切上げ、和三郎だけを敵娼の女郎と一緒に寢かして置いて、鈴木主從は身持堅固な人でございますから、其晩夜中に武島町の自宅へ歸つて參りました、翌朝歸

り掛けに和三郎が、主水の所にやつて參りまして、昨晩の惚氣を云ふやら巫山戯るやら、イヤハヤ暢氣な男で御座います、朝湯に這入つて酒を一杯御馳走になり、御飯を喫べて和『さて若先生、どう云ふ手續きで島本の道場へ入込みませうか』圭『さうさ外に是れと云ふ思案もないが、矢張り私は義世流の熱心家で御座る、宜しく指南を願ふと云つて入門するが宜からう』和『所が私は劍術と來たら棒の持ちやうも知りません』圭『イヤサ出來ない方が却つて好い、如才もあるまいが、お前は氣轉の利いた男だから、巧く隼太に取入つて、さうして脇差があるか香箱があるか一つ調べて呉れろ、弟子入の束修として三分目錄にして上げやうから：』和『宜しう御座います、所で何も見榮を張る譯ぢやアありませんが、何うも此服裝ぢやあ見つともなう御座いますから、お金を一兩二分御呉んなさいな、質に入れてある着物と羽織を出して、少しは扮裝を好くして行かないと、先方で馬鹿にしますからな』圭『道理だ』と金を一兩二分持たしてやりますと、和三郎は間もなく質受をして來て衣服を着替へ和『若先生、是なら彼の娘が惚れませう』圭『呑氣な奴だナ、少しも早い方が好いから、今日直ぐと入門して呉れ、是は別に一兩お前の小遣』和『どうも有難う御座います』と濱名和三郎は其足で島本隼太の道場へ參りまして、案内を賴みますと一人の門弟が出て來た和『エ、手前は公儀直參の浪人者御名流熱心に就て罷出ました、何うか御入門をお許し下さいますやう、宜し

くお取次を・・・』門『暫くどうぞお待ち下さい』門弟が隼太の前へ來て ○『先生御入門を願ひたいといふ者が參りました』隼『エ、又入門か、斯う弟子が殖えては仕方がない、マア此方へ通せ』門弟が再び玄關へ來て案内に連られ座敷へ通り、暫く待つて居りますと隼太が出て參りました、誠に如才のない男ですから、隼太も打解けて兎も角一本遣つて見るが宜いといつて、道場へ案内致しました 和『先生どうでございませう、私は是からでは少し修業の年限が遲うございますか、精々勉強して習ひましたら一人前の使手になれませうか』隼『それはモウ御出精次第で御上達になりませう』其日はあつさりやつて歸りましたが、夫から毎日和三郎が道場へ這入り込んで、他の門弟に逢ふと 和『私は此度御入門を願ひました者、どうか又お引立を願ひます』と御家人の息子とはいふものゝ、野幇間同樣兄弟子の下駄の世話までして 和『私は新參者宜しく御引立下さいませ』と一同へ巧くお世辭を振撒くので弟子仲間で ○『どうも今度入門した御家人の倅といふのは面白い男だ』といふ噂が立ちました、毎朝早く來て他の門弟が殘らず歸るまで居つては、雇老爺の手助けになるやうにと、掃除もすれば臺所働きもし、如才なく立廻つて居りますので、雇老爺も近頃は和三郎さん〳〵と、段々親しくなつて參りました、或時隼太が 隼『濱名さん今夜は一杯飲んで往かんか』和『ヘエ有難うございます』酒の對手と來ては元來得意の方ですから誠に話が面白い、段々隼太の氣に入つて、或

日相變らず酒の對手をしながら 和『時に先生些とお願ひがございますが』隼『何だナ』和『私の親父はモウ疾うに亡なりまして、當時兄が家督を取つて居ります、私は其兄の所に厄介になつて居るのでございますが、何ういふもんか私と兄嫁と誠に性が合ひませんで、毎日喧嘩口論が絶えません、仲に這つて困るのは兄で、私の方を持てば姉がフテルし、姉の肩を持てば私が不足をいふ譯で、兄も困つて居る樣子が見えます、就きましては何うでせう先生、此方へ内弟子にお置き下さる譯には參りませんか、誠に立入つたお話ですが、私一人の喰扶持は兄から此方へ入れるやうに致させますから』隼『イヤお前のやうに働いて呉れゝば、喰扶持なんぞは要らない、實は下女を一人置かうと思つて居るが、私は女を使ふのは嫌でナ、失禮だがお前奉公人代りをして家に居て呉れないか、是は私の方でお頼み申す』和『左うして下されば誠に有難いことで、ちやあ明日から此方へ上り切りに致しませう』と約束致し、其の晩主水の所へ來まして 和『若先生今日は島本へ斯樣々々いつて、内弟子に這入り込むことにしました』と話し翌日隼太の所へ這入りました。

（第三十二席） 和三郎隼太を橋本屋へ誘ひ出す事、並に隼太白絲を身請せんとする事

劍術の道場では昔は大概一六とか、二七とか五十とか云ふ日は休みと極つて居りましたが、隼太は成るべく多く弟子を取らうといふ考から、月に二度、朔日と十五日しか休みませぬそれで月謝も安いので、まだ新らしい道場ではございますけれども、門弟は澤山あります、今日は丁度十五日で稽古休み、隼太は江戸珍らしい時分ですから、何處へか見物に出掛ました樣子、留守は相變らず老爺と和三郎の兩人、時に和三郎が爺さん私はどういふものか、此二三日眼が霞んでいけない、お前誠に氣の毒だが私に眼藥を一つ買つて來て吳れないか、少し遠くつて濟まないが』爺『ハイ宜うございますとも、何處だネ』和『日本橋だ』爺『日本橋は何處だネ』和『石町だ』爺『ヘイ石町で何と云ふ眼藥かね』和『二度附けずといふ目藥だが、何と云つたかッイ藥屋の名を忘れて仕舞つた、名高い藥だから石町に往つて二度附けずといつて聞けば直ぐ分る』爺『ヘエー珍らしい名の藥もあるもんだね』和『ウム一度附ければ直ぐ癒るといふので、二度附けずといふのだ、一貝二百文だが茲に

二朱あるから、之を持つて往つて、一貝買つて來て下さいな、殘りはお爺さんの使賃に上げやう』爺『是はどうも濟みませんな、二百の藥を買ひに行くのに、斯樣に駄賃を貰つちやあ：：』和『ナーニ好いよ』爺『ぢやあ行つて來ますから留守をお賴み申しますよ』そんな藥は無いのでございますから、老爺がいくら探して歩いても分る譯はございません、手間取つて居る間に和三郎は重箪笥から、用箪笥をすつかり探したが、どうも脇差もなければ香箱もない、ハテなと思つて具足櫃を開けて見ると鎧も何もない、まるで空箱、夫れかち脇差と香箱の藏つてありそうな處を、隅から隅まで家探しをしたが、似寄つたものも見えません、和三郎が　和『ハテナこりや鈴木の若旦那が見込違ひをして居るのぢやあないか知らと、探し草臥れて一服莨を喫んで居る所へ、老爺が歸つて來て　爺『和三郎さんどうも隨分尋ねましたが分りません、二度附けずなんて其樣な妙な名の眼藥はないと、諸方の賣藥屋で笑はれました』和『左うかい夫は無駄足をさせて濟まな

かつたな、ヒョッとすると名が違つて居たかも知れない、又能く聞合してからに爲ませう、どうも御苦勞でした』程なく島本隼太も歸つて參りました、其晩は例の通り酒のお對手、隼太はさん〳〵自慢話をして寢て仕舞ふ、翌日和三郎が　和『先生一寸用事がありますから、暫時お暇を』といつて主水の所へやつて參りましてし　和『若旦那樣昨日斯う〳〵云ふ機會がありましたので、すつかり家探しをして見ましたが、何うも脇差も香箱もありません、こりや貴所の見込違ひぢやあございませんか、モウ私は窮屈で堪らないから御役御免を蒙りたい』主水は暫く首を捻つて考へて居りましたが、主『成程ヒョッとしたら拙者の見込違ひかも知れんが、併しどうも隼太に疑ひがある、何うかモウ一骨折つて呉れまいか、禮は後で多分にするから……』和『ヘエー何ういふことをするのでございますか』主『ぢやあ一つ斯う云ふ事にして見て呉れまいか、隼太も女嫌ひでもあるまいから、折を見てお弟子の中の颺輕者を二三人誘出して、新宿の橋本屋へ隼太を伴れて往つて、白絲に逢はして呉れないか、左うすれば隼太は元來お糸に戀慕して居るのだから、屹度足繁く通ふに相違ない、此方はお糸に計謀を授けて、お糸の手で一つ調べさせて見やう』和『それは至極宜いでせう、其方に掛けちやあ私は又旨い計略を用ゐますからな』主『お前の交際費は私が出すから、どうか旨く一つやつて見て呉れんか』和『畏まりました』元來遊興好の和三郎是から只遊べるのですから大喜びで、島本隼

太の處へ歸つて來て、折こそあれと待構へて居りまする、所へ丁度此隼太の門弟の中に放蕩者が三人許りありまして、時も八月十五日一天拭ふが如くに晴れ渡つて、近年稀なる仲秋の名月、今宵は觀月の酒宴を催さうと十人ばかりの門弟を集めて月觀の宴を催す、銘々血氣盛りの若者大いに酩酊して　○『時に先生、貴所も獨身で居られますから、今晩一つ新宿へ參つて、興を添へやうぢやあございませんか』和三郎が　和『イヤ先生時々御保養もお宜しうございませう、皆さんは新宿へ地廻り同樣、一つ御遊興をなすつて入らつしやい、和三郎が今晩はお留守を致しますから』スルト一人の門弟が　△『イヤ濱名お前が行かなければどうも座敷が面白うない、お宅は老爺一人留守居をさせてお置きになれば宜しうございませう』隼太も大きに酩酊をして居りますから、それならばといつて一同打揃つて、新宿に乘込み橋本屋へ登樓致しました、此處で銘々遊興をいたしましたが、其内に白絲も出まして　糸『オヤ近藤さん小川さん齋藤さん、お珍らしい……』といひながらヒョイと島本の顏を見る拍子に、隼太も白絲の顏を見ると、這は开も如何に自分が尾州の犬山に居つた時分に、此婦人の婿養子にもならうといふ一時相談のあつた師匠尾崎有善先生の娘ならんとは、お糸もびつくりして、自『これは』といふ、隼太も　隼『オヤあなたは……』と互に顏を見合せました、他の者は意外に思つて　甲『これは先生、此有名な白絲を御存じか』隼『イヤ此樣な御身分に成つたといふこ

とは一向知らぬが、其昔一つ鍋の物を喫べたこともある……これはどうも不思議な所で御目に懸りました、どうしてマア斯ういふお身の上にお成りなさつたか、遊興の席で陰氣な話も宜しくないが……』糸『種々是には込入つた事情がありまして、何とも不幸續きで面目次第もございません』隼『イヤお不仕合せなればこそ斯う云ふことにお成りなすつたんだらう、其後拙者も浪人致して江戸表へ參り、赤坂の紀伊國坂下へ義世流の道場を構へ、先生の御蔭を以て相應に繁昌して居ります……、時に各々方此白絲殿は私が師匠の娘子だ、當時斯樣な身分になつて居るのを拙者が見知りながら、打捨て置いては師匠へ濟まず、種々話もあるに依つて、今晩白絲殿と語り明す所存、就ては拙者に敵娼の遊女は要らん』

白『御尤もではございますが當家は遊女屋、貴所が此樓へお登りなすつて、遊女をお聘びなさらんでは、誠に具合が惡うございます、詳しいお話は何れ又緩々伺ひます折もありませうから、今晩は皆樣の御遊興をお妨げにならんやう、御機嫌能くお遊びなさつて下さいまし、私も以前の身分は忘れて今は藝者、及ばずながら御座敷の御取持は致しませう』和三郎は素と主水と腹を合して、隼太を態々此樓へ伴れて來たのですから、左あらぬ體にて 和『是は成程先生も久々での御對面、又失禮ながら白絲さんが斯ういふ御身分にならすつたに就ては、種々御話もございませうから、何しろ今晩は同伴も大勢、其御相談は後にして陰氣な話なしに面白く一つ遊びませう』乙『それが宜からう、サア飲まう』といふので盃を遣つたり取つたりイヤもう若い血氣盛りの者ばかりですから、種々な隠し藝を演じて浮れて居ります、これから皆々一寢入りしますと、早くも夜が明けて愈々歸るといふ時に隼太は白絲の顔を一目見たいと思ひましたが、白絲は藝者ですから勿論朝は出て來ませぬ、隼太は少しく不興の體にて其儘其日は立歸りましたが、朝飯を食べて居りますと、門弟がドン〳〵詰掛けて參りました

昨晩の疲れで睡いけれども、隼太も勤めですから怠る譯には往かぬ、一々指南を致す程なく午時晝飯を濟して、又午後の稽古に取掛り、總體の門弟の指南が濟みましたので、ホッと一息茶を飲みながら和三郎を呼んで　隼『コレ和三郎昨晩は不思議の女に、對面を致したな』和『先生那の白絲は貴所の御師匠さんのお娘子だと、昨晩一寸お話がありましたが……』隼『ウム何を隠さう彼は拙者は左の足を先にして、上段は斯う被つて正眼は爾々目の配りはコレ〳〵と此義世流を敎へられた師匠のお娘子だ』和『ヘエーどういふことでそんな御身分の方が、那の新宿の内藝者に』隼『だから夫を一つ聞いて見たいのだ、尤も其師匠は賊に討たれて果敢ない最後を遂げた、それが大醉をした時のことだから、討たれやうが武藝者らしくないといふ、殿樣の御意に適はんので家名は斷絶、夫からして引續く不僥倖と見える、拙者も勿體ないが舊主人成瀨公の家老は、誠に偏頗な御方で如何に武藝が進んでも、忠勤を盡しても相變らず二十五石の少身者、取立てるといふ眼識のない家老の下に、仕へて居るのも面白くないから流浪した』和『ヘエ……』隼『併し忠臣二君に仕へずといふ古人の戒めに背いて、何れへか有付く所存で此江戸へ出て參つたが、何しろ那の婦人をアヽやつて置く譯には往かぬ、師匠の恩報じにどうか樂な身にして遣りたいもんだ』和『先生那の白絲さんと爾ういふ因緣があります なら、貴所もコレ今だに獨身でお在なさることだし、あの位の美人行儀と云ひ、遊藝と云ひ、

貴所の妻君としても恥かしからん者と思ひますが、如何がでございます』隼『實は拙者を其師匠が、彼の婦人の婿にしやうといふ話も一寸あつたけれど、其時分は拙者も血氣盛り、前後の考へもなく放蕩に流れた爲め、遂に破談になつて了つたが、併し今となつて考へて見れば師匠の心が變つて、斯んな不行狀な者を養子にすることが出來ぬと思つたのも無理はないかも知れん、併し一時は拙者も師匠を恨んださ、昔は昔、今は今、どうか彼の子を根引にして拙者の妻女にしたいもんだ、和三郎お前萬事乃公の相談相手になつて呉れんか』和『エ、宜しうございます、デハ先生貴所は時々橋本屋にお出でにならなければ可けません、藝者だから抱寢は出來ませんけれども、貴所がソレとなく白絲に此程の親切があるぞ、といふ所をお見せなさらなければいけません、此方から無理やりに引付けやうとすると、アヽいふ氣高い女ですから跳附けられますぞ、何でも女を欺すには親切が第一の武器、自づと先方から此方を慕ふやうに、仕向けなければ旨く往きません』隼『道理千萬』和『それには今度から若侍など連れずに、私と二人で參りませう』隼『マアどうか宜しく取持を賴む』日が暮れて酒を飲む、是からモウ毎日暇さへあれば、隼太は和三郎を相手に白絲の話ばかりして居ります、一兩日經つて相變らず稽古を了つて、兩人で酒を飲む、一杯飲むと氣が大きくなるのは普通の人情で、其處へ和三郎の取卷が上手ですから　和『どうでげす、今夜あたり橋本屋へ……』隼『ウム一つ

往つて見やうか』と來ると必ず白絲を聘げる、白絲も他に約束の客があつても、和三郎が隼太を連れて參りますと、豫て主水から言含められて居りますから、他の客を外しても隼太の座敷へ出て、チヤホヤ取持をして居ります、隼太の敵娼は白絲が毎日三味線を教へて居る者で、此者へは白絲から旨く話込んでありますから、此者も他に客があつても必ず隼太の座敷へ來て、傍を離れず成るたけ、白絲と隼太と直話の出來ぬやう妨げて居りますから、據ころなく離れる時は自分の代りに、遣手婆を傍へ置くと云ふやうに、旨く操つて居ります、流石の隼太も白絲に向つて　隼『さてお前は私の女房になつて呉れんかと云ふ、直話をする間は御座いませぬ、いよ〳〵氣が焦つて或時隼太が此事を和三郎に相談をすると、和三郎が『ぢやあ私の腹から出たやうにして、一つ私が白絲さんに貴所のお希望を話して見ませう』と云つて和三郎が、白絲を外の座敷へ誘ひ出して　和『白絲さん實は隼太が貴所に首つたけ來ておいでなさる、何しろコヽは大事なところ、お忌でも隼太に心あり氣に口を利かずとも、よい態度で斯う云ふ今の哀れな身の上、心あらばどうか救つて呉れろと、言はず語らず其模樣を見せて島本を釣らなければ可けません、此處女形の大事な役目、爾う云ふ具合に旨くお見せなさい』と取持つて置いて、隼太には體よく挨拶して居ります、白絲は勿論嫌つて居りますけれども、主水の言附もありますから、心ならずも隼太に秋波を送り、樣子で慕ふやうに見せ

ますと、隼太は愈々敵娼には厚く取成され、白絲には秋波を運ばれると云ふ譯ですから、忽ち色男氣取りで新宿へ往かない時には、道場で和三郎を相手に白糸の惚氣ばかり、氣轉利きたる和三郎は又巧に合槌を打ちますから堪らない、飽まで白絲を手に入れやうと迷つて居ります島本隼太、湯水の如に金を遣ひますが橋本屋へ來れば、敵娼の遊女を初め家内の者が○『赤坂の旦那、島本の旦那と云ふてチヤホヤ、下へ置かぬやうにして呉れますから、もう夢中で御座います、此方は和三郎隼太の懷にまだ金があるなと考へながら、種々なことを云つてドン〳〵金を使はせる算段ばかりして居りますから、浪人の劍客、幾ら門弟があつた所で金の入る高は知れて居ります、使ふのが劇しいから、此頃は隼太の懷が大分ギクシャクするやうになつたらしい、恁んな事には機敏な和三郎ですからモウ彼奴の懷中を大概絞つて了つたと思ひますから主水の屋敷へ參りまして　和『さて先生旨く運びました、モウ彼奴の懷中は大概絞つて終ひましたから、茲で一つ身受けの話を持込まうと存じますが』主『イヤそれは大きに骨折だつた、併し爾うするならお糸にも一つ含めて置かんと困るな』和『ぢやあ今日此足で橋本屋へ行つて、白絲さんと打合せをして置きませう』と直ぐに白絲の處へ參りまして　和『さてお糸さん、モウ時期が熟しました、今夜にも隼太を伴れて來ますから今晩は敵娼を呼ばないで、お前さんが隼太にどうも此勤めが辛うございます、不憫と思召すなら何うか身受けをし

て可愛がつて下さいなと、味に搦んでお迫りなさい、私の方でも亦隼太に身受けを勸めますから、さうすると何れ御亭主へ身受けの相談と斯う成りませう、ソコでお前さんが樓主へ其の積りで吹込んで出來ない相談、高い身受けの金を吹掛けさせて下さい、萬事はそれからの仕事ですから』お糸は大きに喜んで、そんならと樓主へ斯くと賴んで置きました、偖て隼太は其夜も例の通り威勢好く橋本屋へやつて來ました處豫て手筈がしてありますから今夜は敵娼は少しも顏を出しません、御酒のお代りと云ふと好鹽梅に小酌が立つてゆきましたから、茲ぞと白絲は隼太の傍へすり寄つて　糸『島本さん私は斯ういふ浮いた商賣をして居りますから氣は樂なやうですが、他から見るとは違つて、多くの客の中には遊女買に來ながら、私に厭なことを言ふ客もありまして誠に辛うございます、以前犬山で貴所へ情なく當りましたのは皆私の僻見心、許嫁同樣の貴所を破談致しましたのも、お安と私が親父さんへ焚付ければこそ、誠に濟まぬ事をしました、どうぞ是れ迄の事は御勘辨下さつて此處で貴所と斯ういふお馴染になりましたのも、深い前世の御緣でございませうから、どうぞ不便と思召して私を受出して下さいナ、私は朝夕貴所のお傍に居て、お世話を致したうございますから……』斯う言はせやうと今まで思つて通つたのですから島本隼太め、イヤ悅んだの悅ばぬではない、併し今日までヨモヤに引かされて心ならずも通ひ詰め、貯への金は大概費つて了つた揚句で

すから隼太も礒と窮して　隼『エヽもう左う言ふ事なら先生への恩報じ、私も斯うやつてお前さんを情けない身の上にして置くのも、實に先生へ濟まぬ譯だから其れは豫て心掛けて居りました……和三郎はどうしました』糸『何だか先刻遣手部屋の方へお出でになつたやうでしたが　アレ那の通り何か騷いで一同を笑はして居りますよ』隼『一寸呼んで下さい』そこで和三郎を呼んで　隼『さて和三郎、白絲さんがどうも川竹の勤めは厭になつたといふから、身受をしてやりたいと思ふが……』和『エヽもうさうしてお上なされりや誠に結構、早速主人に掛合ひませう』隼『ぢやア一つ聞いて呉れんか』和三郎が直ぐと下へ行つて、暫く經つて妙な顏つきをして上つて參りまして　和『先生どうも樓主が分らん事ばかり云つて困ります』隼『どう分らんのだ』和『此節白絲が居るので身分のあるお方々が毎夜御入來になる、云はゞ白絲は當家の金箱、其の者が身受けになれば爾う云ふ上客はなくなつて了ふ、併し身受けをされるといふのは、當人の身に取つては實を結ぶやうなもの、決してお斷り申すとは云はないが、當家の金箱を持つて往かれるのも同樣ですから、少し身受けの金はお高うございます、夫れを御承知なら當人の僥倖になる事ゆゑ、お連れなすつて宜しいと斯ういふのでげす』隼『ウーム何程といふのか』和『最初先方で三百兩位と言ひ出したんですが、漸く五十兩値切つてギリギリ結著の所が二百五十兩といふのでげすがどう致しませう』隼『ウームさうか、併し今茲

でオイソレと受出す譯にはいかん、何れ歸宅の上の事にしやう』彼是する内に床を取つて寢て了ふ、夜が明けて隼太が和三郎を連れて、赤坂の道場へ歸りまするとモウ弟子が詰込んで居ります、稽古をするのは厭だけれども仕方がない、癒て稽古が濟んで門弟が皆歸りましたから、和三郎を呼んで　隼『さて和三郎、實は私も二百五十兩の身受金に困つたといつて、彼れ迄に賴む恩人の娘、何時までも彼處に置くのは如何にも愍然に存ずる、厭だと思ふとアいふ所に片時も居惡いもんだ、今手許の金子と云つた所で百兩しか持つて居らん、どうか百五十兩の金子を調達したいが、何とかお前の知己の内で金を借りる所はあるまいか』和『私は御家人の次男で厄介の身分ですから、私が受人で貴方が借主ぢやア、なか〳〵百五十兩と云ふ大金を貸す者はありません、貴方が何か御祕藏の金目の品はございませんか……質に置くのが先づ一番早道ですが何か金高な質草はございませんか』隼『どうも百五十兩と云ふ金高の質草は……』和『ございませんか』隼『尤も無いことはないが質屋などに置けない品だ』和三郎は腹の中で旨く往きさうだと考へながら　和『ヘエ質屋へ持つて行かれぬ品物なら、私に好い工風があります、藏前の札差で隱居でウンと金を有つて居る者がございます、これが古筆古畫茶の湯道具總て此古い品で良い道具を大層好んで居りますから、良い道具なら抵當にすれば相當の金は貸しませう、唯困ることには札差の隱居ですから、刀脇差鎧兜、總て軍道具爾

ういふ物には少しも眼が利きません、茶の湯道具古筆古畫爾ういふ物なら、好い物を持つて行きやウンと金を貸して呉れます、此の隱居に話して借りる方が利分も安し手輕だらうと思ひます』隼『ウムそれも然うぢやア、其札差の隱居の方へ一つ賴まうか』和『品物は何でげす』隼『今見せる』と隼太は立上つて、踏臺を持つて臺所へ出て行きました、暫時すると出て來て小さい袱紗に包んだ物を出しました　隼『サア和三郎他言は無用、此品をマア先に一つ見て呉れろ』和『ヘエー』といつて居る中に袋から一本の脇差を出しました　和『是は先生脇差ですな、困つたもんで今お話し申す通り脇差は隱居は餘り好まない方で……』と言ひながら見ると目拔緣頭金づくめの誠に結構なもの、スッと拔いて　和『どうもこいつは良い身ですな、何といふ人が鍛へたんで』隼『粟田口藤四郎吉光』和『どうも大層なものですな』隼『何處へ出しても耻かしくない脇差だ』和『けれども隱居は餘り刀劍類は好まない、只だ此金だけで取るのですから此品ぢやア百五十兩は難かしうございませう』隼『ぢやアまだある』といつて袱紗包から出したのを見ますると、豫て主水から言含められて居る金の香箱、蓋に十六羅漢が毛彫になつて、眞中に梵字が一字刻んであります、和三郎は心の中に成程此品だと思ひながら　和『ヘエ此品なら隱居が喜びませう、何でげすな、此蓋に刻込んであるのは』隼『是は十六羅漢だ』和『ヘエー羅漢樣……成程立派ですな、此眞中にある梵字は何と云ふのでげせう』隼『何と云ふか未だ

に讀んだ者がない』和『ヘエー此蓋の裏に後藤徳女作とありますが、此人が此彫刻をしたんでげすか』隼『ウム後藤徳女と云つては毛彫の名人だ』和『成程此品は隠居が喜びませう、此品なら百五十兩よりもつと金を出すかも知れません』隼『此品は私が先祖から傳つた大切な寶物だから、是非受出さなければならぬ、序だから先方で貸せるだけ借りて吳れないか、さうして餘り他人に見せないやうに賴んで吳れ』和『畏まりました、ちやア一つ早速往つて見ませう』

隼『どうかさうして吳れ』和三郎は謀計圖に當れりと心中に喜びつゝ、其二品を持て隼太の道場を飛出し藏前の隠居の處へ往くとは眞赤な僞り、四谷傳馬町の高砂屋宗左衞門方に來つて、お安に彼の二品を見せると、お安も大きに喜んで　安『多分此二品に相違はございますまいが、どうも私はハツキリ覺えがございません』といふ、其れから駕籠を二挺云ひ付けて主水とお糸を迎ひにやりますと、直ぐに乘つて來ましたお糸主水の兩人は、和三郎から委細の話を聞いてその二品を調べると、正に盜賊に奪取られた吉光の脇差、十六羅漢の香箱に相違御座いませぬ、お糸は涙を流して　糸『此二品を所持して居る以上は、父を討つたは隼太の仕業、是れぞ何より確かな證據、少しも早く隼太の道場へ飛込んで本望を達したうございます』と悦び勇んでハヤ立掛りましたから、主水は驚いてこれを止めます、和三郎お安も共々に止めて一同は、何か相談をいたしました。

（第三十三席）白絲隼太を殺して本望成就の事、並に主水三平を討ち、父の仇を報ゆる事

和三郎は兎も角彼二品を持つて立歸り、隼太に手渡して金を借りるのは明日の事と云つて其夜は休みました、翌日は平素の通り弟子の世話などをして平生と少しも變つた樣子もございません、此方はお糸、和三郎より樣子を聞いて無念道る方なく主水の所へ少しも早く、復讐の無念を霽したいといふ手紙を度々寄越します、然るに月に叢雲花には嵐といふ譬へ通り、主水の母親が病に倒れて、醫者も全快の見込みがないといふ、お糸のことも氣に懸りますが主水は母親の看病で、少しも間がございませんのでたゞ氣を揉むばかりで御座います、さて月日の經つのは早いもので今月今宵が、父尾崎有善が島本隼太に討たれた丁度三年目の祥月命日、白絲は自分の部屋へ亡父の位牌を飾り付け、橋本屋の菩提寺の和尚を招いて御經讀誦をして貰ひ、自分も懇に位牌に向ひ手を合して回向して居りまする、さて此方は島本隼太、日が暮れますと何うも白絲のことが氣になつて堪らないので、不相變和三郎と兩人で橋本屋へやつて來ました、それから白絲を呼んで酒宴になりましたが、白絲は隼太の顏を見れば見る程無念に堪へず　糸『ア、殘念ぢやわい、現在讐と知りながら一太刀怨むことも出來ず、却て此

奴の玩弄になつて機嫌を取結ばなければならぬか』と思ふと涙が胸一杯になりまして平生のやうに氣も引立たず、顔の色も惡う御座いますので隼太が　隼『白絲さん何で今夜はそんなに欝いで居なさるか、昔は兎も角も當時は客の機嫌を取結ぶ役ぢやアないか、それを俺が來たのに欝いで居ては可かんぢやアないか』と云はれてお糸はハッと心付き、襦袢の袖で密と涙を拭うて　糸『島本さん、私の父が最後をしたのは三年あとの今月今宵……私は當時斯ういふ勤めをして居ますが、父の命日ゆゑ何方のお座敷も斷つて、心ばかりでも回向供養をして居るのでございます』隼『ハテ失錯つた、エライ事になつた、イヤ俺の方で面目ない、白絲さん、今夜はモウ宜い早く部屋に歸れ、明日は一日後れても先生の回向をしやう、今夜は嘸ぞ辛かつたらう、サア〳〵部屋へ歸つて呉れ……俺もモウ寢ることにしやう』白絲は是れ幸ひと自分の部屋に歸りますと、隼太は敵娼の女郎に誘はれて寢ました樣子、其晩はどういふものか日頃繁昌の橋本屋も寔に客が少なくて、三味線の音のしたのは隼太の座敷ばかり皆祕密に遊んで早く床に就くものと見えて寂として居ります、白絲は位碑の前に頂垂れて、今宵父の敵が現在二階に寢て居ながら、其讐を討つことの出來んと云ふのは、鈴木さんの戒めがあるからのこと　糸『あゝ儘にならぬは浮世かな』と右つ左つ考へながら一心に回向をなし凝と亡父の位牌を見詰めて居りますと、燈火は油が切れたせいか、將に消えなんとして薄くぼんやり

輝いて居ります、其中に立つて居る香の煙がスーッと上に昇つて渦卷のやうに妙に固つた、ふと見ると其煙の中に亡父の姿がぼんやり見えます　糸『アレ父上樣……』と云ふ其聲で思はず我に返へりますと香の煙がパッと散つて父の姿がスッと消えて仕舞ふ、胸はドン〳〵早鐘を突くやう、流石のお糸も堪りかねて　糸『鈴木さんの御言葉に背いては相濟みませんが、私の無念ばかりか今の亡父の正姿、私も武藝者の娘、讐討するに人手を待つには及ばない、一時たりとも此世の中に生けて置くのは不幸の至り、やはか父の讐なる島本隼太、其儘に置くべきや』と孝女お糸が勃然とばかり立上り、四邊の樣子を窺へば森々として寢入りばな、豫て用意の九寸五分の短刀を取出し、小褄搔き上げ身輕き扮裝ち、登る梯子は十二段、拔足差足隼太の寢て居る部屋の前へ來て、蹲んで耳を欹て中の樣子を窺つて居りますと、グウ〳〵といふ隼太が雷のやうな鼾が聞えます、スーッと障子を開けて中へ這入つて見ると敵娼は、面白くない客ですから、何處へ往つたか居りませぬ、是れぞ父の手引きとお糸はヤオラ隼太の上に乘蒐り、短刀をギラリと拔放ち、無念骨髓に徹してブル〳〵顫へながら親の讐と口の内、咽喉をぐさりと突かうとした時に、隼太がヒョイと氣が付いて細目を開いて見ると這は开も何如に、年月焦れて居る白絲が上に乘り蒐つてギラ〳〵する短刀を今胸元に刺さうとする危急の場合、吃驚仰天して隼太が突然起上る途端に白絲は短刀を持つたまゝ彼方に跳落

されて南無三寶、起き上らうとする白絲の細手を確と取押へて　隼『白絲何故我を害さんとするか』糸『エ云ふな〳〵三年以前の今月今宵、能くも父有善を討取つたのみかは武士にあるまじき所業、能も吉光の脇差、金の香箱を奪ひ取り居つたな、最早遁れぬ天の網、女ながらも親の讐だ覺悟をしろ』親の讐といはれて隼太は　隼『オ、それを知つたか白絲、モウ斯うなつちやア是までだ、汝の命も貰つた』と遁が武藝者、如何に白絲が猛り狂つても力づくちやア敵ひません、膝へ引つけ短刀を奪ひ取らうとすると、此方は奪ひ取られじと爭ふ女の一心、餘り物音が劇しいので樓中の者や和三郎も驚いて駈付けて見ると、隼太がお糸を膝の下に組敷いてお糸の持つて居る短刀を奪ひ取らうとする、お糸は奪はれまいとする大變な騷動、恁ふなつて見ると柔强の和三郎も猶豫して居られない、突嗟に隼太の背後へ廻つてグッと隼太に組付いて、自分が仰向に轉んだから堪らない、隼太も一緒に引繰かへる　隼『和三郎、俺を捕へて何うするんだ』といふ聲を耳にも掛けず、力はないが和三郎も一生懸命　和『お糸さんモウ斯うなつちやア仕方がない、此和三郎も突通す氣で力を籠めて突いてお仕舞ひなさい』　隼『ヤッ、そんなら和三郎、汝も同類であつたか』和『オ、鈴木主水に賴まれて汝の惡事を探りに道場へ入込んだ間者だ』隼『ヤア謀られたか無念千萬』茲ぞとお糸は短刀を取直しッカ〳〵と寄つて來て、島本隼太の胸元目掛け拳も通れと一生懸命、プッーッと突き通した、サア樓中

の大騒ぎとなりまして、亭主の清兵衛も駈付ましたから、和三郎が橋本屋に向つて一伍一什を話し　和　全くお糸さんが親の讐討をしたので、委細はどうか高砂屋に居るお安殿と武島町の鈴木主水先生を呼んでお聞き下さい』と云ふので左らばといつて橋本屋から双方へ宙を飛ばして使を出しますと、お安は取るものも取敢へず駕籠を飛ばして參りまして、此體を見るより涙を流して喜びました、御檢視の下りないうちにといふので、お安が白絲の短刀を借り安『お主の仇』と隼太へ一と突き刺通す所へ平賀佐平治、鈴木主水、高砂屋宗左衛門の三人が駈付け一伍一什の話を聞き主水は大望ある身の上ですから義俠の心に富みたる清兵衛が一切取仕切つて、右の二品を證據に此始末を代官所へ御屆けに及ぶと、程なく檢視が來て段々取調べの上町奉行、御勘定奉行、公事方双方へ御屆けに及び御勘定奉行中根河内守奉行木下大内記、双方係の者から成瀬遠江守へ掛合になりますと　○『さては島本隼太が尾崎有善を殺害したのか、惡むべき奴、それのみか師匠尾崎の讐討に出る杯と申立て、主人を欺いて手當金まで貪り取るとは不忠不義の白者なり』と殿樣始め家中の憎み一方ならず、島本隼太なる者は此方の師範役尾崎有善を討つて立退いた不忠不義の者、お糸は尾崎の愛娘、女性ながらも一身を以て父の仇を討取つたは遁れなる者、當方に於て然るべき者を養子に入れて、尾崎の跡を相續させたうござるゆゑ引渡して呉れるように』といふ返答、是れは仇討停止の御布

令の出ない前でありますから、何のお咎めもございませぬ、お糸は尙ほ當分橋本屋に居ることになりまして、島本の死骸は引取人がございませんから、其儘取捨て道場は缺所、彼の二品は尾崎の所有品に相違御座いませぬから、お糸へ下し置かれることになりまして此事は總べて落着になりました、サア此一件が日本國中の評判になりましたのを尾州の殿樣がお聽なされて、尾崎有善といふ者は我父が鹿狩の折、御褒美として金の香箱を下し置れた緣もあるといふ所から、尾崎の跡を立て田地田畑を買戻すには、先立つ物は金子なりとて特別の御褒美として、三百兩尾張の太守よりお糸に下し置かれました、然るに主水の母上はいよ／＼重くなつて養生叶はず病死致しました、主水は齒噛をして口惜しがり　『お糸殿は美事に仇討の本望を達したが、我は如何なる不幸ぞ、母の存生中に敵を討つことが出來ぬとは』と拳を握つても及ばぬ事、仕方なく／＼懇ろに葬式を濟まして四十九日の忌日が濟みますと、豫ての約束、小笠原重左衞門が媒介でお糸は目出度く主水の妻となり、お安も主水が引取つて下婢代りに使ふことになりました、偖て又此方は小笠原重左衞門の義心から、森の屋敷へ間者に入れて置きました者から、注進がありまして、御國表の長尾治太夫が筑波三平、富士要藏といふ兩人を連れて江戸勤番に出向いたといふことを申越しました、主水は母親の存命中に此吉事を聞けば誠に結構でございますが、併し是れも仕方がない、此上は一日も早く仇討を

致したいといふので、尙ほ小笠原重左衞門方へ參りまして萬事の計畫を打合せ、筑波三平の他行を間者から手紙で知らして來ますのを待受けて居ります、長尾治太夫は元來磊落の人でありますから、江戸勤番は男世帶、閨の淋しき儘に品川の遊女屋淀屋金兵衞方に繁浦といふ美人がありまして、此女に大層深くなつて通ひまする、富士要藏、筑波三平の兩人は何時も付いて行きまして、朝歸りは森家の御門の明く時分、朝薄暗い中に品川を出るといふことが分りました、そんならば朝歸りを待つて讐を討たうといふ、尙ほ又間者に品川通ひを告げて呉れといふことを賴んで置きまするとと、間者から今晩品川へ例の通り出掛けた、明朝は早歸りでござると知らせて寄越した、時は元祿二年二月十二日の晩、大きに喜んで鈴木主水、平賀佐平治、小笠原重左衞門、奥平の家來水谷三左衞門其他鈴木傳內兵衞取立ての門弟が集まつて來て　○『主水殿助太刀は御迷惑でござらうが、先方は大勢同行の者が若し筑波三平の助太刀を致すやうなら、我々も師恩に報ゆるため其者共を斬つて捨てる覺悟、何うぞ一緒にお連れ下さるやう』にと云ふ、一同天下泰平に生れた武士、大先生に御敎授を受けた義世流の腕前を現はす時節到來したといふので、大層弟子達が集まつて參りました、讐討の場所は三田の三角が宜からうといふ、夜中に一番町の小笠原重左衞門の邸にて勢揃ひをした、併し一同が揃つて出掛けると目立ちますから、三人一組五人一組になつて提灯を燈して、別れ／＼に

三田の三角へやつて參りまして、大導寺内藏之助の邸前が地の理が宜いといふので、提灯を吹消し一同軒下に三方より備を立つて待つて居るとは露知らず、翌十三日の明方長尾治太夫富士要藏、筑波三平其他若侍以上六人、仲居は一人も居ない、昨夜の惚氣話をしながら、通り掛りました三田の三角、ソレッといふより早く待構へて居りました鈴木主水、平賀佐平治其他の門人バラ〳〵ッと跳り出で 圭『ヤア珍らしや筑波三平汝に逢はん爲め此年月の艱難辛苦、我こそ鈴木傳内兵衛の伜鈴木主水なるぞ、能も作州津山に於て計略を廻らし、押原友次郎をして我を罪人に落さしめ、能くも死罪に行はんと巧みしよな、サア尋常の勝負に及べ』

佐『我は傳内兵衛取立の平賀佐平治、御主人なる鈴木の大旦那の恨みの刄受取れッ』と呼ばはつた、筑波三平吃驚して思はず後へヂタヂタと退る 圭『卑怯未練の奴かな、遁れんとして も許さぬぞ』といふ中に、周圍にグルリと傳内先生取立の弟子が取卷いて、人間の矢來が出來ました、齒嚙みをなした筑波三平 三『偖は今まで我を敵と狙ひ居つたか、斯うなるからは是非に及ばん、如何にも我れ遺恨あつて傳内兵衛を斬つて捨たに相違ない、反討に致すから覺悟をしろ』討たれる敵が反討といふのは定文句、主水は手早く羽織を引脫ぎ提緒を取つて早襷、時に三平の考へでは此方には長尾治太夫始め其他の者が居るから、いざといふ時には定めて手を貸すであらう、ムザ〳〵討たれもすまい、併し油斷はならぬと心を締めて居りま

す、所が長尾治太夫も富士要藏も全く不意を喰つた許りか、昨夜の疲れもありますので、只茫然として見て居ります、これを大勢して傍へ遠ざけて了ひましたから、サア筑波三平一人になりまして、心細くなつて堪りませぬ、一層腕が鈍つて來る、所を主水佐平治の兩人斬立て〳〵肉薄つて來る、何かは以て堪るべき、筑波三平とう〳〵其處に斬倒されて仕舞ふ、一同周圍を取卷て居た者が ○『親の讐目出度々々』と手を拍つて喜ぶ、そこで長尾治太夫外一同の者は這々の體で森の邸に立歸りました、この讐討は小笠原重左衞門が證人になりまして御届けに及びましたので、程なく檢視役が參りまして一應取調べになりますと、鈴木主水は立派に仇討の御許可を受けて居りますからお構ひなし、偖筑波三平の死骸は長尾治太夫が引取り、相當の葬式を出してやりました、主水等は三田三角を引揚げて一旦三番町の小笠原方へ參り、一同祝杯を擧げて別れ、夫れから主水は菩提寺へ來て、亡き父母の墓所の前へ手を突いて宛然生きたる人に物言ふが如く、首尾克く讐を討取つた次第を述べて厚く父母の亡靈を慰め直ぐ又此始末を大阪堂島の神免重助へ詳さに申送りますと、神免老人も長らく肝膽を碎いた效あるを大きに喜びました、主水は此功に依つて御目見得以上に出世したといふ、同時に佐平治も主水の願ひに依つて御手先同心に取立てられ、三十俵一人扶持を賜はる事になりました、彼の轡屋藤次郎の娘お千は、後に是れ又神免老人の媒介で佐平治の妻となり間もな

く子供も出來ました、又主水お糸の間にも子供が澤山出來ましたので、二男を以て尾崎の家を相續させ、目黒の田地田畑も悉皆買ひ戻しました、其後主水はます〳〵忠勤を勵み小十人御番人から大御番御撰人になり、それから御納戸御番、御裏御門番頭、御舟手頭、御徒頭と昇進しまして老年に至つて二の丸御留守番に召出され、伜の道之助は御書院番元高二百俵代代天下の御旗本、又秋月右門は土佐の高知に其他關係の者一同もます〳〵繁昌したといふことでございます、長らく讀み續けましたる鈴木主水比翼の仇討も先づ是れにて大尾と致します。

長篇講談 鈴木主水 終

大正九年六月十日印刷
大正九年六月十五日發行

長篇講談 第五十二編
鈴木主水 ——全部

編者 小林東次
發行者 東京市本郷區本石町三丁目十六番地 株式會社博文館 代表者 恩師役社長 大橋進一
印刷者 東京市小石川區久堅町百〇八番地 吉岡泰次郎
印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地 株式會社博文館印刷所

《正價六拾八錢》

發行所 東京市日本橋區本石町三丁目 株式會社 博文館
振替貯金口座東京二四〇番

不許複製

家庭團欒の好讀物

長篇講談

講演者は當代の名人

1 木下藤吉郎
2 赤穂義士
3 笹岩見野武名勇傳槍傳
4 伊達騷動
5 佐怪談牡丹燈籠
6 村天一の夜櫻
7 佐倉宗五郎
8 由井正雪

23 宮本二刀の譽父子
24 山中鹿之助
25 榛名の梅ケ香
26 甲賀忍術の勇士淺香
27 寛永三馬術
28 小金井小次郎
29 柳生旅日記
30 柳川庄八

45 祐天吉松
46 雪國羽織小の濱町
47 古市十人斬
48 仙石騷動
49 野盤猿飛佐助
50 德川家康
51 毛谷村六助

9 大久保彦左衛門
10 紀伊國屋文左衛門 紀伊國屋五兵衛
11 荒木又右衛門 荒木又右衛門 淺川伴五郎
12 幡隨院長兵衛
13 羽柴筑前守
14 相馬誠忠錄
15 復讐天下茶屋
16 加藤清正
17 水戸黃門漫遊記
18 自來也 石川五右衛門
19 國定忠次
20 鹽原多助
21 豐臣秀吉
22 一休 一休和尚 文覺上人

31 關東七人男
32 粂平内
33 堀部安兵衛
34 鼠小僧次郎吉
35 塚原卜傳
36 太閤
37 加賀騷動
38 雷電爲右衛門
39 田宮坊太郎
40 日蓮記
41 野晒勘三郎
42 三家三勇士
43 日本左衛門
44 旗本五人男

52 鈴木主水

續刊

山本勘助
蒲生三勇士
勢力富五郎
四谷怪談
岩稲荷利生記
戸田新八郎
光秀旅日記

以下續々刊行

四六判美裝五百餘頁
新鑄活字總振假名附
艷麗極彩色口繪二葉
精巧密畫八十個挿入
正價各六十八錢
送料各六錢

東京 株式會社 博文館 本石町

繪稗小説史本

博文館編輯局校訂

繪本稗史小説

集むる所は馬琴が傳奇體小説、蘭山等が春水人情本、金水曲山人等が九三小説も種彦京傳の中の傑出し一稗史なり乃至十集中種次第に出版せんとす

中の文鯉滑稽物語

なり二十種を收錄して今日に行はる

の編纂なり

大方諸彦幸に愛讀を賜はらんを

1 繪本三國妖婦傳 松浦佐用媛石魂錄

道成寺鐘魔記、お六櫛木曾仇討、粂平内剛力物語、蓑浴衣國七編、高尾丸劍稲妻、女船頭矢口渡場、御贔奇談ふた子山、驛路鈴與作春駒、跳染劇模様

2

3 松風村雨物語、繪本在原草紙、淨瑠璃姫物語

4 復讐奇談小夜中山、入船倭取掛、關東小六昔舞臺、閑道女自來也、蜘蛛お長嫐双草、播州皿屋敷物語、重扇五十三驛、柳糸花紐交驚、娘の來由

5 總優曇猩華僧物語

6 花暦八笑人、實色安本丹、身代山吹色、盧の川、滑稽郡鶯枕、腹佳話鳴鶯八藝

7 紫田舍源氏（前卷）

8 修紫田舍源氏（後卷）

9 飛驒匠物語、閑情末摘花、月氷奇緣

10 笠松峠鬼神敵討、小幡怪異雨古沼、明烏後正夢

【新刊】

11 糸櫻春蝶奇緣、阿波の鳴門、花暦封じ文

以下續刊

12 大經師宗像暦、隅田川梅若緣起、奴の小まん、松わかん山年男金豆蒔、復讐雨夜傘

13 繪本金石譚、繪本亀山話、百物語長者萬燈

14 三十三間堂棟材奇傳柳の絲、近世怪談霜夜星、黄鳥墳物語、唐人畫今國性爺、裏見葛の葉

15 滑稽和合人、天王寺まゐり道化根物語、素人芝居箱草

▲四六判和裝美本▼口繪大判一葉小判數葉▼正價▲紙數各約四百三十頁▼挿畫九十個乃至百個▼各册 六十八錢 第一段各六編

Ath
111

終